大和郡山市埋蔵文化財調査報告書　第13集

郡山城第61次

― 弥生時代集落の調査 ―

2008年
大和郡山市教育委員会

大和郡山市埋蔵文化財調査報告書　第13集

郡山城第61次

—弥生時代集落の調査—

例　言

1．本書は、大和郡山市城見町546－2他で実施した発掘調査の報告書である。
2．調査は、株式会社フクダ不動産によるマンション建設に伴って大和郡山市教育委員会が実施した。
3．調査期間、調査面積は下記の通りである。
　調査期間　試掘確認調査：2006（平成18）年4月17日・18日
　　本　調　査：2006（平成18）年6月19日～7月10日
　調査面積　試掘確認調査：約86㎡
　　本　調　査：約120㎡
4．調査は、以下の組織で実施した。
　調査事務　大和郡山市教育委員会　社会教育課
　調査担当　十文字健（大和郡山市教育委員会　技術員）
5．調査に関する重機、作業員、賃借物は、試掘確認調査から本調査まで全て事業原因者の直接執行でおこなった。
6．調査及び報告書作成には下記の諸氏の参加があった。（五十音順、敬称略）
　大江綾子、神野悠、川崎幸彦、中山千彰、長谷川義明
7．調査及び報告書作成に際しては、奈良県立橿原考古学研究所・寺沢薫氏、橋本裕行氏より貴重な御教示・御指導を得た。記して感謝いたします。
8．本書の執筆・編集は十文字がおこなった。
9．調査に関する写真・実測図・出土遺物は全て大和郡山市教育委員会が保管している。広く活用されたい。

凡　例

1．遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中の方位は座標北を示す。
2．遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
3．遺物番号は全て通し番号になっており、実測図・観察表・図版それぞれの対照が可能である。
4．遺物実測図の断面は、弥生土器が白抜き、須恵器が黒塗り、瓦質土器がアミ掛けとした。
5．土器の色調は『新版標準土色帖』に拠る。

目　次

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2
第３節　郡山城の沿革と周辺における既往の調査 …… 5

第Ⅱ章　調査の経緯と経過 …… 8

第１節　調査の経緯 …… 8
第２節　調査の経過 …… 9

第Ⅲ章　調査の成果 …… 11

第１節　層序 …… 11
第２節　遺構 …… 12
ⅰ　概要 …… 12
ⅱ　弥生時代の遺構 …… 13
ⅲ　近世の遺構 …… 18
第３節　遺物 …… 20
ⅰ　概要 …… 20
ⅱ　土器 …… 20
ⅲ　土管 …… 26
ⅳ　石器 …… 28

第Ⅳ章　まとめ …… 29

第１節　遺構の変遷 …… 29
第２節　弥生時代集落について …… 31

挿図目次

図１．奈良県の位置 …… 1
図２．大和郡山市の位置 …… 1
図３．調査地と周辺の遺跡 …… 3
図４．調査地と周辺の既往の調査 …… 5
図５．確認調査トレンチと本調査区 …… 8
図６．確認調査トレンチ土層柱状図 …… 9
図７．調査区東壁土層断面図 …… 11
図８．調査区平面図 …… 12
図９．竪穴住居１平面図・断面図 …… 13
図10．竪穴住居２平面図・断面図 …… 15
図11．弥生時代の溝、土坑平面図・断面図 …… 17
図12．埋甕平面図・断面図 …… 18

図13. 貼石遺構平面図・立面図・断面図……19
図14. 竪穴住居１・２出土土器……20
図15. 溝、土坑出土土器……21
図16. 埋甕出土土器……21
図17. 包含層（Ⅱ層）出土土器……22
図18. 包含層（Ⅲ層）出土土器①……23
図19. 包含層（Ⅲ層）出土土器②……24
図20. 貼石遺構出土土管……27
図21. 石器・石製品……28
図22. 竪穴住居の変遷……29
図23. 推定される遺跡の範囲……31
図24. 周辺の低丘陵上の遺跡……32

表 目 次

表１. 調査地周辺の既往の調査 ……6
表２. 郡山城年表 ……7
表３. 竪穴住居１床面検出遺構一覧……14
表４. 竪穴住居２床面検出遺構一覧……16
表５. 土器観察表①……24
表６. 土器観察表②……25
表７. 土器観察表③……26
表８. 土管観察表……26
表９. 石器計測表……28
表10. 西ノ京および矢田丘陵の弥生時代遺跡33

写真目次

写真１. 調査地近景（埋め戻し後、南西から）……19
写真２.「和州郡山城絵図」中の調査地周辺 ……30
写真３. 郡山城と調査地……図版扉

図版目次

図版１　上. 調査区全景（北東から）
下. 調査区から北方の谷を望む（南から）
図版２　上. 調査区東壁土層（西から）
中. 調査区東壁土層（北西から）
下. 包含層遺物出土状況
図版３　上. 竪穴住居１・２近影（北西から）
中. 調査区近影（南東から）
下. 調査区近影（北から）
図版４　上. 竪穴住居１（北東から）
中. 竪穴住居１柱穴近影
下. 竪穴住居１炭混入土（北東から）
図版５　上. 竪穴住居２（南から）
中. 竪穴住居２遺物出土状況（南から）
下. 竪穴住居２埋土（南西から）
図版６　上. 埋甕（南から）
中. 貼石遺構（南西から）
下. 貼石遺構近影（北西から）
図版７　竪穴住居１・２出土土器
図版８　竪穴住居２、溝、土坑出土土器
図版９　埋甕、包含層（Ⅱ層）出土土器
図版10　包含層（Ⅲ層）出土土器
図版11　包含層（Ⅲ層）出土土器
図版12　包含層（Ⅲ層）出土土器
図版13　土管・石器

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

郡山城は、奈良県大和郡山市の市域北部に所在する城郭遺跡である。大和郡山市は奈良県の北西部を占める奈良盆地の北部から、奈良県の西端を南北に連なる生駒山地の一角である矢田丘陵にかけての範囲に位置している。

市域の地形を詳細にみると、大部分が奈良盆地に位置し、標高40～80ｍの低地がひろがっている。市域を北から南に向かって流れる富雄川と佐保川が主要な水系であり、小規模な支流を伴いながら、市域の南端部分で奈良盆地から大阪湾へ貫流する大和川に合流する。また、市域の南部には低地の中に独立するような形で額田部丘陵がある。市域の北西部には、生駒山地の一部である、矢田丘陵と西ノ京丘陵が連なっている。いずれも南北方向にのびる丘陵地で、先述の富雄川は両丘陵の間にある谷部を流れる。標高400～600ｍの生駒山地から東に向かって緩やかに標高を減じて、矢田丘陵では標高200～300ｍ、西ノ京丘陵では標高100ｍ前後となる。これら丘陵地の先端付近からは、南東方向への眺望が良好であり、奈良盆地を眼下におきながら盆地の北・東を区切る山地までを一望することが可能である。

郡山城は、西ノ京丘陵の南端部に位置する。丘陵先端の地形を取り入れて築城しており、城郭の中心部分と武家屋敷地が丘陵上に、城下町の大部分が低地に位置する。城郭の整備に際して秋篠川の付け替えなど大規模な土木工事がおこなわれている。また、現在の行政機構の中心も郡山城が所在する市域北部に集中している。

図１．奈良県の位置

図２．大和郡山市の位置

第2節　歴史的環境

本節では、郡山城周辺の歴史的環境について、西ノ京丘陵南端部と周辺の低地を中心に主要な遺跡を取り上げて、主に考古学の成果が得られているものについて述べたい（図3）。また、今回の調査では郡山城築城以前の遺構が多く検出されたことから、築城以前の状況に主眼をおく。

旧石器時代の遺跡は現在知られていない。これは当地域に限ったことではなく、市内全域に目を向けても、わずかな出土例があるのみである。縄文時代の遺跡には、古屋敷遺跡がある。古屋敷遺跡では自然河道から後・晩期に該当する土器が出土したほか、当該期に属する土坑も検出されている。市内全域においても縄文土器の出土例は後・晩期に属する例が多く、当該時期に周辺の低地部に生活の拠点が広がっていったと考えられる。

弥生時代は前時代と比べて遺跡数が増加する。西ノ京丘陵上には六条山遺跡、一ノ谷遺跡、別所谷遺跡、城の台遺跡がある。また、郡山城内でも過去の調査で弥生土器の出土例があるが（第9次）、次節で詳述したい。これらの遺跡はいずれも後期に属するもので、特に六条山遺跡の調査は、後期土器の詳細な分析がおこなわれたことで広く知られているところである。同丘陵縁辺の低地部には、田中垣内遺跡がある。竪穴住居や環濠が広い面積にわたって調査され、集落の存続期間は後期から古墳時代前期までとされる。満願寺遺跡でも竪穴住居を検出している。富雄川西岸で矢田丘陵の縁辺には外川遺跡があるが、後期に属する土器が採集されているのみで詳細は不明である。以上のことから、郡山城周辺における弥生時代の遺跡は、現在知られているものに関しては、立地を問わずにいずれも後期以降のものが中心であるという傾向をみてとれる。これらの集落については、小泉地域に展開する弥生時代の遺跡ともあわせて第4章で詳しく述べたい。

古墳時代は、周辺で最大級の前方後円墳である新木山古墳をまずあげる。古墳は西ノ京丘陵南端の縁辺部に築かれ、全長約123mで市内でも最大級のものである。しかし陵墓参考地に治定されていて調査例が皆無であることもあり、実態については明らかでない。墳丘の形態から後期に該当すると考えられる。新木山古墳から富雄川を挟んで西側には割塚古墳がある。直径49m、高さ4.5mの円墳で、長さ13.6mの長大な横穴式石室と家形石棺が確認されている。また、同丘陵上には小規模な群集墳が築かれている。一方、西ノ京丘陵の丘陵上には古墳があまり知られていないが、郡山城内（第2・4次）や一ノ谷遺跡の調査で古墳に伴うと考えられる遺物が出土していることから、当初から全く存在していなかったわけではなく、後世の開発によって破壊された古墳があったと推測される。同時代の集落としては、低地部で、長塚遺跡の方形区画、東城遺跡の玉類の製品・未製品が出土した竪穴住居、満願寺遺跡の大溝や竪穴住居といった調査例がある。また、稗田・若槻遺跡や本庄・杉町遺跡においても前期に該当する土坑が調査されている。

古代では、やや南方の神ノ木遺跡や高月遺跡、来光遺跡、筒井城下層で、7世紀代の掘立柱建物などの遺構が検出されているが、調査地の周辺はやや希薄である。8世紀代には平城京が築かれる。平城京については、従来京域が九条までとされていたが、近年の調査成果から、左京域については「十条」まで条坊が施行されたことが判明している。右京域では確実に平城京条坊と関連する遺構が検出されていない。郡山城内の調査でも、奈良時代の遺構が検出されているが（第9次）、部分的な成果であり、今後の調査成果に拠る部分が大きい。また、同時代には丘陵上では一ノ谷遺跡で多量の祭祀遺物が、低地部では長塚遺跡、東城遺跡で掘立柱建物が確認されている。稗田・若槻遺跡の調査では下ツ道を横断する人工河川と共に橋脚や周辺に投棄された多量の祭祀遺物など、注目すべき成果がある。平安時代に関しては、稗田・若槻遺跡で掘立柱建物が検出された他には、現在調査成果がほとん

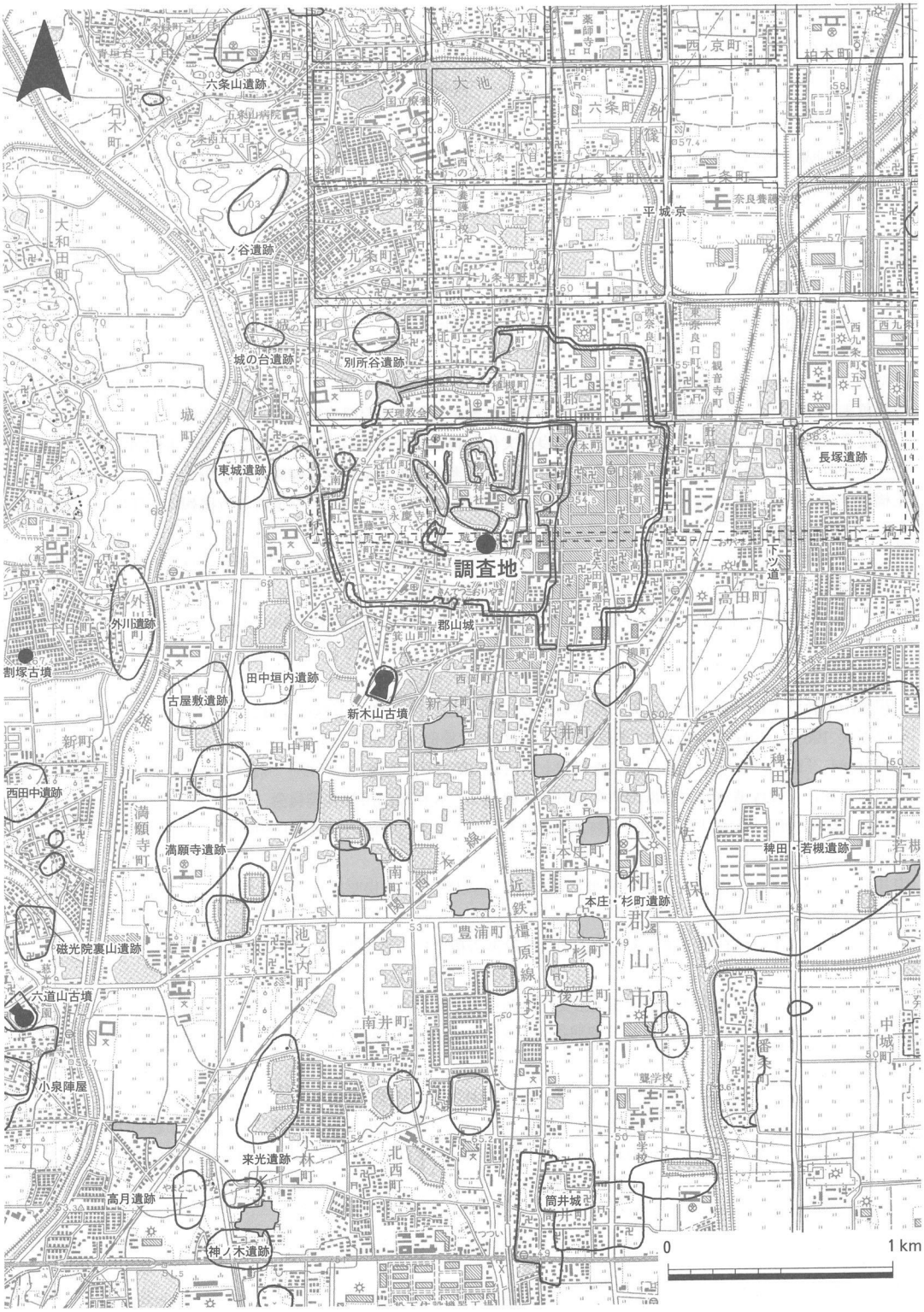


図３．調査地と周辺の遺跡（1/25,000）　アミかけは環濠集落

ど得られていない。

調査地の周辺の低地部には、中世以降環濠集落が多く形成されている。これらは条里制水田と共に、当時の景観を現在までよく残している。郡山城築城以前には、平地城館である筒井城が築かれている。城の実態については近年の範囲確認調査によって廃城時の様相を中心に徐々に判明しつつあり、現在も継続して調査中である。

郡山城築城以後は、政治経済の中心が城の周辺に集中し、近世を通じて現代に至るまで城下町を中心に発展していくこととなる。

参考文献

〈全般〉

柳沢文庫専門委員会編 1966 『大和郡山市史』 大和郡山市役所

〈縄文～弥生時代〉

林部均 1989 「古屋敷遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1986年度』 奈良県立橿原考古学研究所

寺沢薫編 1980 『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集　奈良県立橿原考古学研究所

三須俊介・岡林孝作 1996 『一ノ谷遺跡』奈良県文化財調査報告書第74集　奈良県立橿原考古学研究所

佐々木好直 1997 『別所谷遺跡』奈良県文化財調査報告書第75集　奈良県立橿原考古学研究所

土橋理子編 1986 「郡山城・三ノ丸跡―郡山城第9次発掘調査報告―」『奈良県遺跡調査概報1985年度』 奈良県立橿原考古学研究所

大和郡山市教育委員会 2003 「田中垣内遺跡第２次～第４次調査」『平成14年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会

藤井利章・嘉藤恵喜 1983 「満願寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』 奈良県立橿原考古学研究所

〈古墳時代〉

大和郡山市教育委員会編 1988 『矢田丘陵周辺の古墳文化』 大和郡山市教育委員会

小島俊次 1969 「割塚古墳の調査」『青陵』14　奈良県立橿原考古学研究所

東潮 1984 「郡山城・三ノ丸跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報1984年度』 奈良県立橿原考古学研究所

山川均 1987 『長塚遺跡』大和郡山市文化財調査概要８　大和郡山市教育委員会

中井一夫編 1990 「大和中央道関連遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1989年度』 奈良県立橿原考古学研究所

中井一夫・奥田久司 1983 「若槻庄関連第４次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』 奈良県立橿原考古学研究所

山川均 1989 『本庄・杉町遺跡』大和郡山市文化財調査概要14　大和郡山市教育委員会

〈古代以降〉

山川均編 1994 『神ノ木遺跡』大和郡山市文化財調査概要31　大和郡山市教育委員会

山川均・濱口芳郎 1991 『高月遺跡発掘調査報告書』大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第１集　大和郡山市教育委員会

山川均 1992 『来光遺跡第１次発掘調査概報』大和郡山市文化財調査概要24　大和郡山市教育委員会

山川均 1995 『来光遺跡第２次調査発掘調査概報』大和郡山市文化財調査概要32　大和郡山市教育委員会

山川均編 2004 『筒井城第５次発掘調査報告書』大和郡山市埋蔵文化財調査報告書第９集　大和郡山市教育委員会

山川均・佐藤亜聖 2007 「下三橋遺跡の発掘調査について―古代都市平城京に関する新知見―」『条里制・古代都市研究』22　条里制・古代都市研究会

中井一夫・伊藤勇輔 1982 「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1980年度』 奈良県立橿原考古学研究所

泉武 1983 「若槻遺跡第２次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』 奈良県立橿原考古学研究所

山川均編　2006 『筒井城第７次発掘調査報告書』大和郡山市文化財調査報告書第10集　大和郡山市教育委員会

第３節　郡山城の沿革と周辺における既往の調査

郡山城は天正年間に筒井順慶によって築城された。築城後はそれまでの拠点であった筒井城より移り、以後大和における中心的な城郭としての位置を占める。

築城以後の状況に関しては既往の調査報告書に詳しいため、本節ではその大筋を別表にまとめ、簡略な概要を述べるにとどめたい。その上で調査地周辺の既往の調査成果にふれる。

筒井順慶の築城時の城郭の中心は、現三の丸一帯と推定する案もあるが不明である。城郭は豊臣秀長の入部によって、城下の繁栄政策もあり大和随一の発展を遂げることとなる。次に入部した増田長盛によって城下町の外堀の完成をみるが、この際に、秋篠川の付け替えなど非常に大規模な土木工事がおこなわれる。慶長５年、大阪夏の陣で郡山城は焼き払われ、一旦廃城となるが、元和元年に水野勝成が入部して城が修築される。以後、松平、本多と度々城主を替えながら、享保９年に柳澤吉里の入部以降は明治の廃城にいたるまで柳沢家が代々城主を努めることとなる。城郭の中心部が現在の状況に近い状況になるのは柳澤入部以降と考えられる。

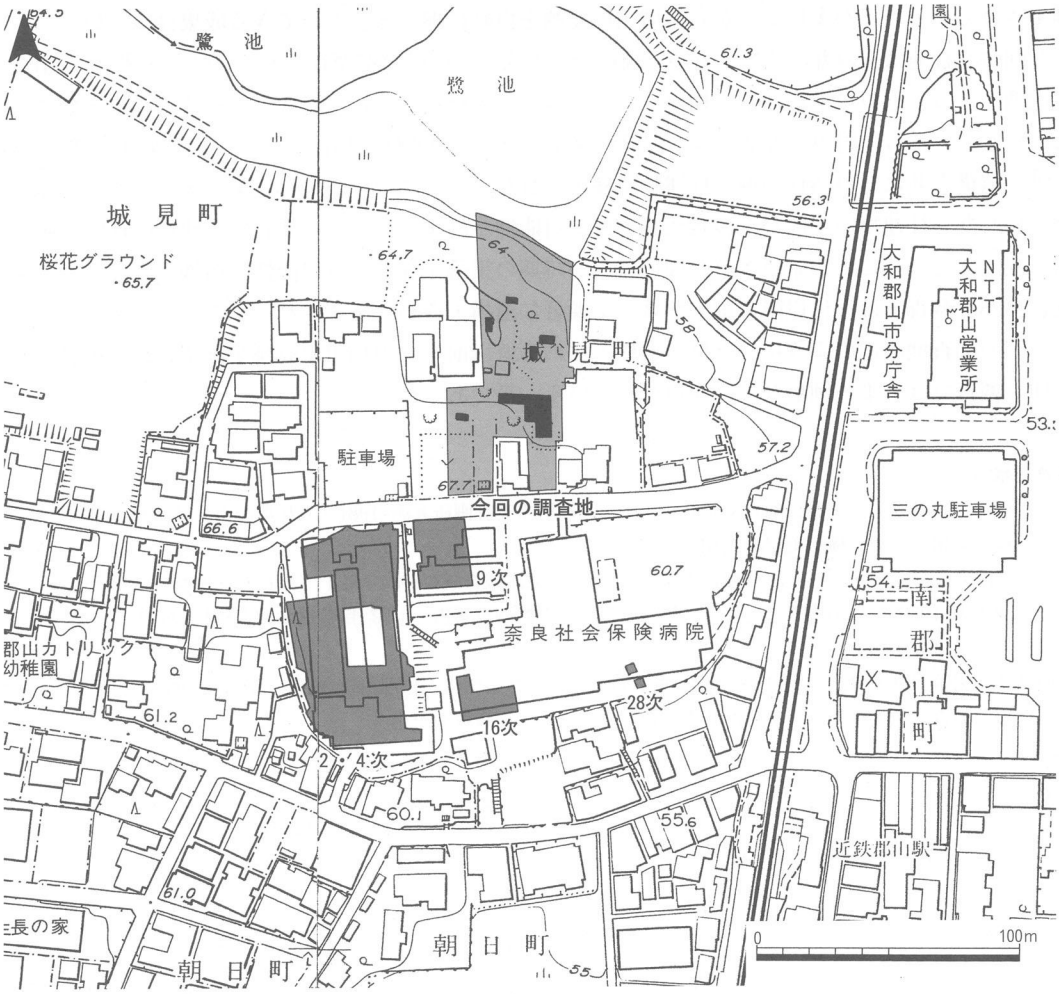


図４．調査地と周辺の既往の調査（1/2,500）

次数	調査地	調査原因	調査機関	調査期間	調査面積	主な遺構・遺物
2・4	朝日町516他	マンション建設	奈良県立橿原考古学研究所	1982.10.12 ～12.16 1983.6.12 ～8.10	2200㎡	掘立柱建物（奈良？）、近世屋敷跡 須恵器大甕、埴輪、呉須赤絵
9	朝日町57	マンション建設	奈良県立橿原考古学研究所	1985.6.19 ～7.24	500㎡	掘立柱建物（奈良）、近世屋敷跡 弥生土器
16	朝日町1-62	病院改築	大和郡山市教育委員会	1988.8.4 ～8.24	180㎡	特になし
28	朝日町520-42	病院改築	大和郡山市教育委員会	1991.1.16	12㎡	特になし

表１．調査地周辺の既往の調査

現在は内掘内の本丸を中心として、法印郭、玄武郭、毘沙門郭、陣甫郭が県指定史跡に、城下町を含めた外堀までの範囲が周知の遺跡になっている。

城内での発掘調査は、主に開発に伴う事前発掘調査が中心であり、城下町までの範囲を含めて、今回の調査で61次を数える。調査面積があまり大規模でないことや、近代以降の開発によって遺構面が削平されていることが多いことから、城内の変遷を良好に捉えることのできる成果は少ない。

今回の調査地は三の丸に該当するが、周辺では過去に４件の発掘調査がある（図４・表１）。第２・４次調査では、近世の遺構が密に検出されている。出土遺物には古墳時代の須恵器大甕や玉類が含まれていたことから、周辺に破壊された古墳が存在していた可能性が指摘されている。第９次調査では、近世の遺構と共に奈良時代の掘立柱建物が検出された。この調査の成果から第２・４次調査で検出されていた掘立柱建物の一部が奈良時代まで遡る可能性が高まった。この調査では建物の柱穴に弥生土器が混入していることが確認され、周辺に当該時期の集落が存在する可能性が指摘されていた。第16次、第28次調査では近代以降の削平が著しく顕著な遺構・遺物は確認されていない。

今回の調査地周辺のように、近世の遺構と共に築城以前の土地利用の痕跡が確認される例は、城内の他の調査ではあまり例がなく、注目されている一帯であった。

参考文献

大和郡山市教育委員会・奈良国立文化財研究所・㈱環境事業計画研究所 1981『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定調査'81』

東潮 1984 「郡山城・三ノ丸跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報1984年度』 奈良県立橿原考古学研究所

土橋理子編 1986 「郡山城・三ノ丸跡―郡山城第９次発掘調査報告―」『奈良県遺跡調査概報1985年度』奈良県立橿原考古学研究所

服部伊久男編 1989『郡山城第16・17次発掘調査報告書―社会保険大和郡山総合病院及医師看護婦宿舎建設工事に伴う事前調査―』大和郡山市文化財調査概要12 大和郡山市教育委員会

西暦(年号)	城主	支配体制	城郭の変遷	城下町の変遷
1580 (天正８)			・「領邑合テ三千石、只今の本丸かき上げにて住居、二ノ丸に家老を初め、家来百姓入交りて居候よし申伝候」(郡山城日記)	
1585 (天正13)	筒井家	・筒井順慶がこの地に目をつけ縄張り ・信長の「国中破城令」により、大和国では郡山城のみ残る ・順慶、郡山城に入る	・廃城となった多聞山城の大石を筒井に運ぶ ・郡山城天守閣を急造	・筒井城下の商家郡山に移転。本町・塩町・魚町の成立
1595 (文禄４)	豊臣家	・豊臣秀長が入部（100万石）	・本格的な築城の開始 ・紀州根来寺の大門を城門として利用 ・春日社の水谷川から大石を切り出し、郡山に運ぶ。石が不足し、多くの礎石、石地蔵、五輪石などが持ち込まれる ・本丸毘沙門曲輪・法印郭・緑郭・二の丸・キリン郭・玄武郭の完成	・奈良での商売を禁じ、郡山城下繁栄策をはかる。 ・箱本制度はじまる。箱本13町の成立（本町・魚塩町・堺町・柳町・今井町・綿町・藺町・奈良町・雑穀町・茶町・材木町・紺屋町・豆腐町） ・多武峰大職冠の郡山遷座
1600 (慶長５)	増田家	・増田長盛入部（20万石） ・増田長盛除封	・外廻り惣堀（外堀）の普請にかかる ・外堀の完成→郡山城の規模決まる（総延長50丁13間、内側に土塁、外側が堀）	・城下町の発達。家中も城下に集中し始め、侍屋敷も多くなる
1615 (元和１)	廃城	・大久保長安郡山在番、奈良代官となる ・大阪夏の陣で、郡山城下焼き払われる	・郡山城建物伏見に移す	
1618 (元和４)	水野家	・水野勝成入部（６万石）	・石垣・堀の修築（幕府直轄） ・二ノ丸台所角櫓・本丸御殿・三ノ丸・家中屋敷の修復	
1639 (寛永16)	松平家	・松平忠明入部（12万石）	・二ノ丸屋形の造営 ・鉄御門・一庵丸御門・桜御門・西大手門の城門を伏見城より移す ・近世郡山城の威容が整う	・五軒屋敷が整う ・侍屋敷・広島町できる ・雑穀町南端の傾城町（遊郭）を洞泉寺に移す
1679 (延宝７)	本多家	・本多政勝入部（19万石）	・将軍上洛時建設の本丸屋形のとりこわし	・武家屋敷の増築（2757人の家臣団） ・奈良口町東・新九条町・高田町・片原町・観音寺町・柳６丁目が建てられる。「掛け作」と称する町屋もできる ・城下の家数は、4700軒、人口20000人（家中は除く）を数え、近世城下町最盛期を迎える
1685 (貞享２)	松平家	・松平信之入部（８万石）		・本多時代の新屋九拾壱軒ならびに広島町の武家屋敷を取り壊し田畑化 ・大火の発生により、町屋1670軒余消失
1724 (享保９)	本多家	・本多忠平入部（12万石）		・侍屋敷を広島町に建増 ・火見櫓４ヶ所建てる ・城下の復旧に町屋は瓦葺、塗り込め、土蔵造、塗屋造を奨励 ・二度目の大火発生により、本家490軒、借家434軒、寺４ヶ所消失 ・家中屋敷の縮小（150～160軒とり壊し）
	柳沢家	・柳沢吉里入部（15万石） ・金魚の飼育はじまる ・大雨領民５～６千人免乞す	・城郭漸次整う	・武家屋敷漸次整う ・柳沢氏、初期において主な侍屋敷576軒 ・内町（外堀の内）箱本13町含め27町・外町（外堀の外又は年貢地）・外箱本13町 ・紺屋株組合「覚」なる ・光慶寺消失、綿町火事 ・柳町村、村づくり（柳裏タンボ） ・紺屋仲間株の成立 ・郡山大火（雑穀町・茶町・野垣内町消失） ・郡山米騒動 ・天明の大飢饉（大風雨、洪水、凶作） ・寛政の大風雨により、侍屋敷78軒、町屋107軒、領内民家1234軒潰れる ・郡山屋敷、検地改 ・安政の大地震（倒壊150軒、半壊400軒）

表２．郡山城年表

『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定調査’81』より一部改変

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

2006年３月28日付けで、株式会社フクダ不動産より、城見町546－２他におけるマンション建設に伴う発掘届出書が届けられた。当地は周知の遺跡である郡山城跡であり、開発が建築面積895㎡に及び、掘削深度も深いこと、また、周辺での既往の調査において古代から近世にかけての遺構が密に検出されていることから、開発地内における遺構の有無についての試掘確認調査が必要であると判断された。

関係機関による協議の結果、大和郡山市教育委員会によって試掘確認調査をおこなうことになった。調査は2006年４月17日・18日にトレンチ６本を設定しておこなった。調査の結果、事業地の南半で近世の遺構と弥生土器を含む包含層が検出され、本調査が必要と判断された。また、事業地の北半は、大部分が近代以降の造成で地形が改変されており、顕著な遺構が確認されなかった。

試掘確認調査に基づいて関係機関による協議をおこなった結果、遺構が確認された事業地南半の大部分が駐車場として地下遺構が破壊されないことになったが、一部は破壊が免れないこととなり、調査による記録保存が必要と判断された。そこで、破壊される部分でも弥生土器を含む包含層が良好に残存している部分を中心として本調査をおこなうことになった。

本調査は大和郡山市教育委員会によって2006年６月19日から７月10日までの期間でおこなった。調査の実働日数は14日、作業員数はのべ48人、バックホーのべ２台である。調査の経過及び結果については次節以降に詳述する。

なお、試掘確認調査から本調査までの作業員、重機、賃借物品は、すべて事業原因者の直接執行でおこなった。

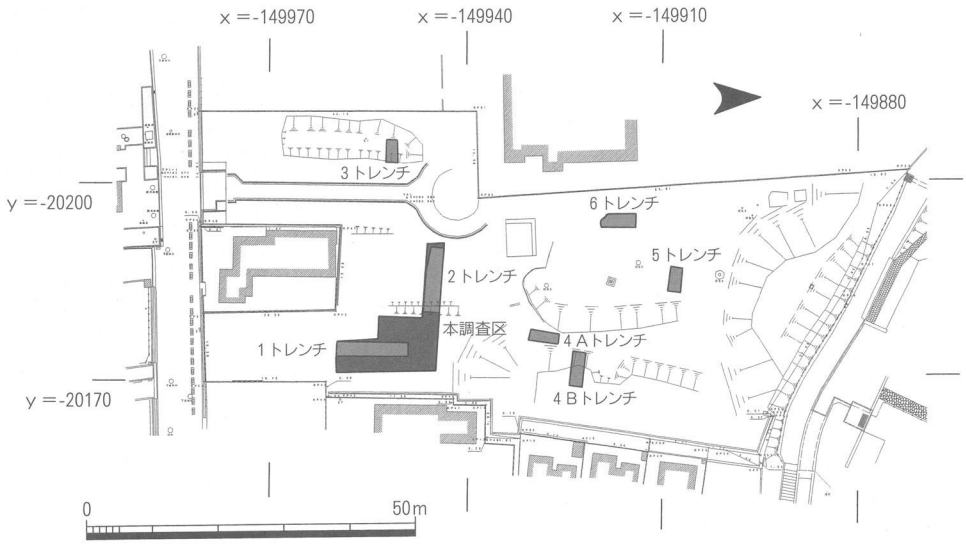


図５．確認調査トレンチと本調査区（1/1,000）

第2節　調査の経過

本調査の経過を述べる前に、まず試掘確認調査の経過について述べる。

調査は幅2mのトレンチを6本設定しておこなった（図5・6）。トレンチの設定は、建設設計案と事業地内の現況地形から計画した。調査以前の現況は、宅地内の庭園として利用されており、事業地内は基本的に平坦な部分が多いが、一部起伏に富んだ部分がある。ここでは事業地内の地形を大きく北・中央・南の3つに分ける。事業地の南は平坦で、周辺における既往の調査で遺構が確認されている部分とほぼ同じ標高である。この平坦部の西端に南北方向の高さ1m程の高まりがある。事業地の中央は西から東に向かって2段の地形になっており、特に中心部分には高さ約1mの独立したマウンドがある。事業地の北は、事業地外北方の池（城跡の中堀）に向かって急に下る地形である。トレンチはこの中で南と中央を中心に設定した。

1・2トレンチは南の平坦部に設定したトレンチで、近世の遺構と弥生土器を含む包含層が検出され、本調査をおこなった部分である。3トレンチは平坦部西端の南北方向の高まりに設定したトレンチで、この高まりが現代のものであることを確認した。中心部分のマウンドの裾から東へ1段下がる部分に設定したのが4トレンチであり、このマウンドを含めた事業地中心部分の大部分が、近代以降の造成によって形成されたことを確認した。また、地山上面においても遺構は検出されず、1トレンチで確認されたような包含層も残存していなかった。5トレンチはマウンドの北西に設定したトレンチで、ここでも4トレンチと同様の成果を得た。6トレンチはマウンドの西側の平坦面に設定したトレンチであるが、一帯はかつて庭園の池として利用されており、遺構面が大きく削平されていることを確認した。以上の成果から、事業地の中央よりも北側については近世まで遡るような遺構が残存しておらず、南側の平坦部分のみに遺構が残存していると判断した。

本調査は上記の試掘確認調査の成果と、建築設計をあわせて範囲を設定した。調査区は1トレンチで包含層を確認した部分を中心に設定した。2トレンチの東半では同層が残存していないことから、1トレンチ北半の地形が大きく北に向かって下る範囲から2トレンチまでを調査区とした。本調査の経過については調査日誌抄にまとめる。

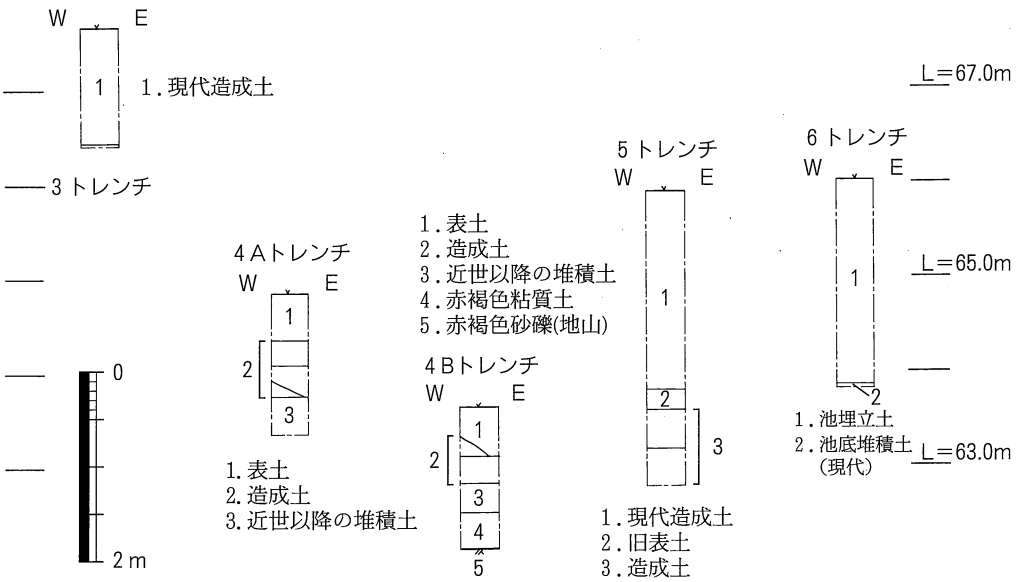


図6．確認調査トレンチ土層柱状図（1/80）

※1・2トレンチは本調査のため図示せず

調査日誌抄

6月19日（月）晴

本調査区設定。重機と人力によって表土掘削。

6月20日（火）晴

人力による精査。調査区南半は弥生？～近代のピット多数。検出、埋土の記録と併行して完掘。調査区北半は表土以下、厚く造成土が入っていることを東壁に沿って設定したサブトレンチで確認。造成土下には黒褐色の弥生土器を含む層が残存しているようだ。本調査区内北半は北に向かって大きく傾斜している。

6月21日（水）晴

調査区北半の造成土を重機と人力によって除去。黒褐色包含層上面で掘削を止める。調査区北端付近は削平により黒褐色包含層が残存していない。明日からの雨に備えて厳重に養生する。

6月23日（金）

基準点測量。

6月27日（火）晴

黒褐色包含層を人力で掘削。遺物は調査区内でも東に向かって多くなり、西半ではほとんど出土しない。東壁際で特に多数の土器が出土したため、写真撮影。西半では、埋甕など、この包含層を掘り込む遺構があったため、図面をとった後に掘り下げ。

6月28日（水）曇のち晴

調査区南半の平坦部分の遺構掘削ほぼ終了。平坦部から斜面に至る場所で竪穴住居と考えられる掘り込みと立ち上がりを確認。

6月29日（木）晴

2棟の竪穴住居が調査区中央で切りあっていることを平面的に検出。なお、住居埋土の一部を、包含層掘削の際に誤認して掘り下げてしまったことを確認。住居の北半部分は、近代以降の造成によって削平されているようだ。住居アゼ設定後掘削開始。試掘確認調査で検出のみで調査を中断していた貼石遺構の掘削開始。瓦質の土管を検出。暗渠か。

6月30日（金）曇一時晴

住居2棟掘り下げ。貼石遺構完掘、写真。文化財審議委員長田光男氏来訪。

7月3日（月）曇一時雨

住居掘り下げ。調査区平面図実測用の杭設置。住居1断面図実測。

7月4日（火）晴一時曇

住居掘り下げ。断面観察用のアゼ外し。住居2断面図実測。各住居床面のピット半掘。調査地全景写真撮影。平面図用の杭設置継続。奈良県立橿原考古学研究所寺沢薫氏来訪。

7月5日（水）曇一時雨

調査区平面図実測。各住居平面図、ピット断面図実測。

7月6日（木）曇一時雨

住居2棟完掘。写真撮影。残りの遺構も全て完掘。

7月7日（金）曇時々雨

各遺構、調査区図面。

7月9日（日）晴

図面作業。

7月10日（月）曇時々晴

図面作業の残りと、撤収作業。資材等全て撤収。調査全工程終了。

7月11日（火）

埋め戻し。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　層序

調査地は丘陵の頂部から斜面への傾斜変換点に位置し、今回の事業地内でも南側の平坦面と北端周辺では、現地表面の標高に約４ｍの高低差がある。斜面は南西から北東方向へ下るもので、現況では本調査区のすぐ北側から傾斜し始める。試掘確認調査の成果から、現況地表面は近代以降の盛土によるものであることが判明している。本調査区以北の傾斜地は、盛土施工以前は現況よりも傾斜が急であったと考えられる。

本調査区の基本層序は、各層の関係が良好に観察できる調査区東壁の断面をもって述べる（図７）。厚さ約0.2mの表土下は、大きく４層に大別できる。この大別層位を、上部から順にⅠ～Ⅳ層とする。なお、調査区の北半は、表土とⅠ層の間に地山の黄褐色土ブロックを大量に含む造成土が入っている。本調査区の北端部はこの造成に伴って地山まで達する削平を受けており、良好な堆積が残存していない。また、調査区の南半平坦部分は、表土及び造成土以下で地山に至る。

Ⅰ層は灰黄褐色砂質土からなる層で、厚さ約0.2m。調査区の中央部分を中心に幅約３ｍで東西方向に残存している。埋甕など近世の遺構が掘り込まれる層で、近世以前までに形成されたものである。人為的な盛土であるかについては断定できない。Ⅱ層は灰褐色砂質土からなり、最も厚い部分で0.2ｍが残存する。この層中には須恵器が含まれるが、最も多い遺物は弥生土器の小片である。形成の時期は不明である。調査区内でも中央東方のごく狭い範囲にしか残存していない。Ⅲ層は黒褐色および暗褐色粘質土からなり、弥生土器を多量に含む遺物包含層である。調査区の東端付近では色調が微妙に異なる２つの層に細別できるが、包含する遺物の内容に差異は認められない。調査区中央の地山が傾斜する部分全体に広く残存している。弥生時代集落の廃絶後、斜面地に形成された自然堆積層と考えられる。Ⅳ層は黄褐色土、明褐色砂質土からなる地山である。大阪層群に属するこの層は花崗岩バイラン土と粘質土が傾斜しながら互層状に堆積している。弥生時代の遺構はこのⅣ層上面で検出した。調査区内での上面の標高は64.7～66.1ｍである。

弥生時代の遺構は北東方向に向かって緩やかに下る斜面地に展開しているが、この範囲は郡山城築城以前の自然地形が良好に残った部分と考えられる。本調査区の周辺では、築城の際に大規模な地形改変を伴う造成をおこなわず、自然の丘陵地形を利用した設計がなされたのだろう。

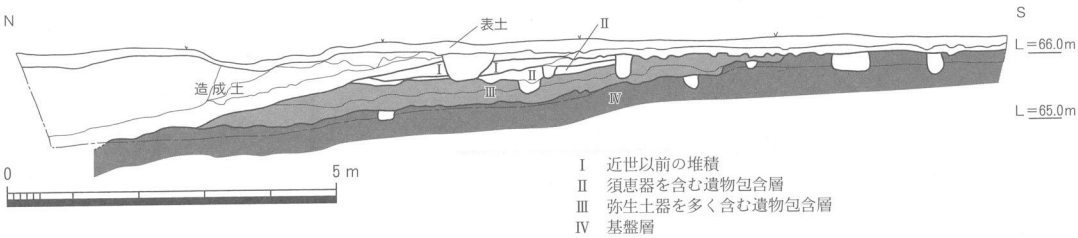


図７．調査区東壁土層断面図（1/100）

第2節　遺構

i　概要

遺構は主に弥生時代と近世に属するものを密に検出した（図8）。主な遺構には竪穴住居、溝、貼石遺構、埋甕があるが、大半が直径0.2m～0.4mの円形のピットである。これらのピットの多くからは遺物が出土せず、時期の判断ができない。また、ピットの埋土には大きく2種類がある。一つは灰色から灰黄褐色土系のもの。もう一つは黒褐色の粘質土系のもので、弥生土器を多量に含むⅢ層に良く似た土で、弥生土器の小破片を含む。当初は、後者の遺構については、弥生時代に属するものと判断していた。しかし、後者の一群の中には重複関係から陶磁器の破片を含む遺構よりも新しいものがあり、埋土の種類からのみでは単純に分別できないことを確認した。よって、今回の調査では、Ⅲ層除去後に検出した遺構のみを弥生時代に属するものと判断する。Ⅲ層が残存していない南方の平坦部分で検出した遺構で遺物の出土がないものについては、埋土が他の弥生時代の遺構と近似しているものであっても、時期が不明と判断した。

以下、時期の判別ができた遺構についてのみ報告する。なお、遺構番号は住居については検出順に、住居を除くものについては時期や遺構の種類を問わずに1から順に通し番号を付与したものである。

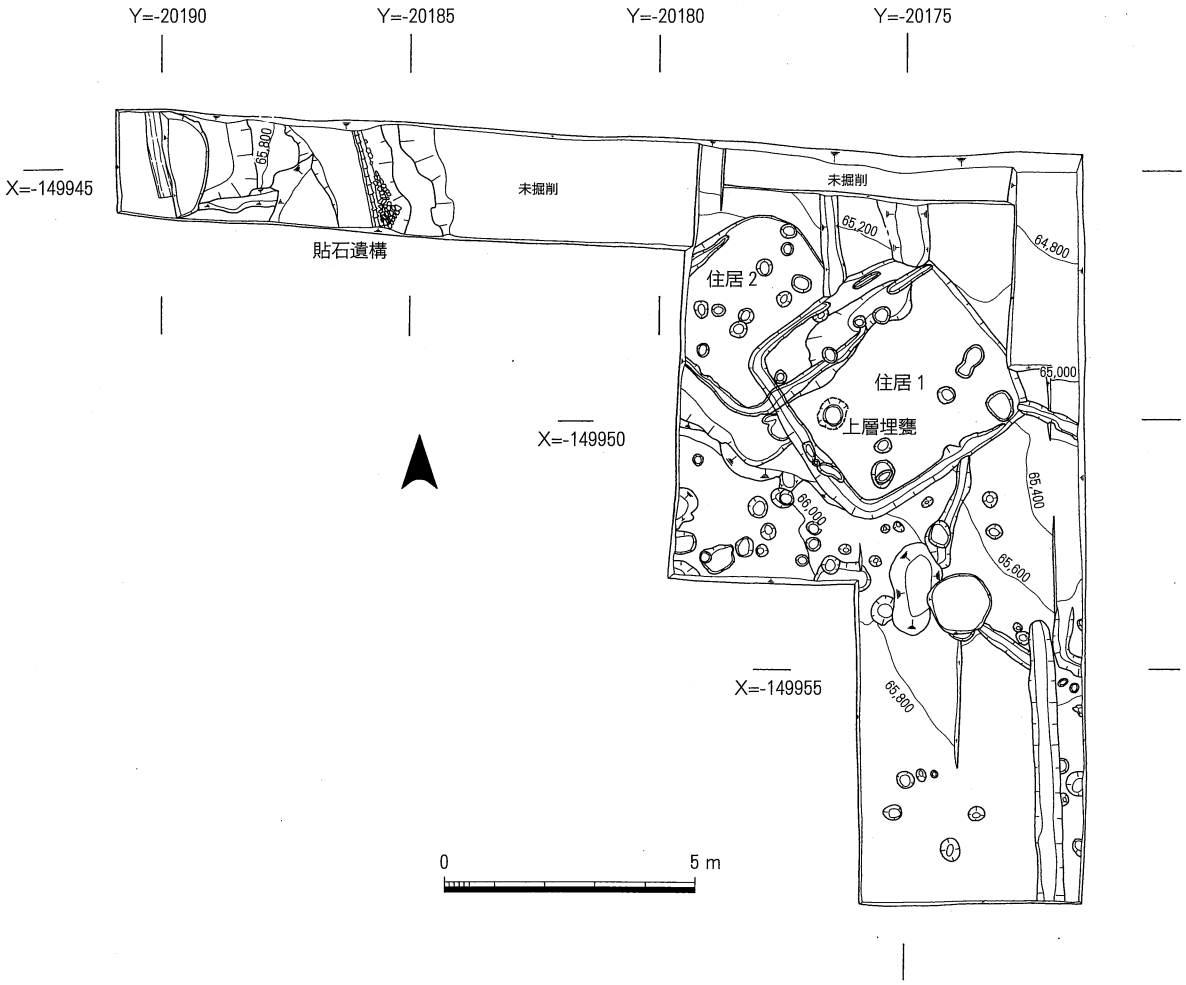


図8．調査区平面図（1/150）

ii　弥生時代の遺構

弥生時代に属する遺構には竪穴住居、溝、土坑、ピットがある。調査地が斜面地であることから、後世の流失もあるが、遺構の残存状況は比較的良好である。以下、竪穴住居とその他の遺構についてそれぞれ項を設けて報告する。

(1)竪穴住居

竪穴住居１（図９）　本調査区のほぼ中央に位置する。斜面地に掘り込まれた住居で、遺構検出面の標高は65.2～65.9mである。後述する竪穴住居２と重複しているが、竪穴住居２の埋土を掘り込んで

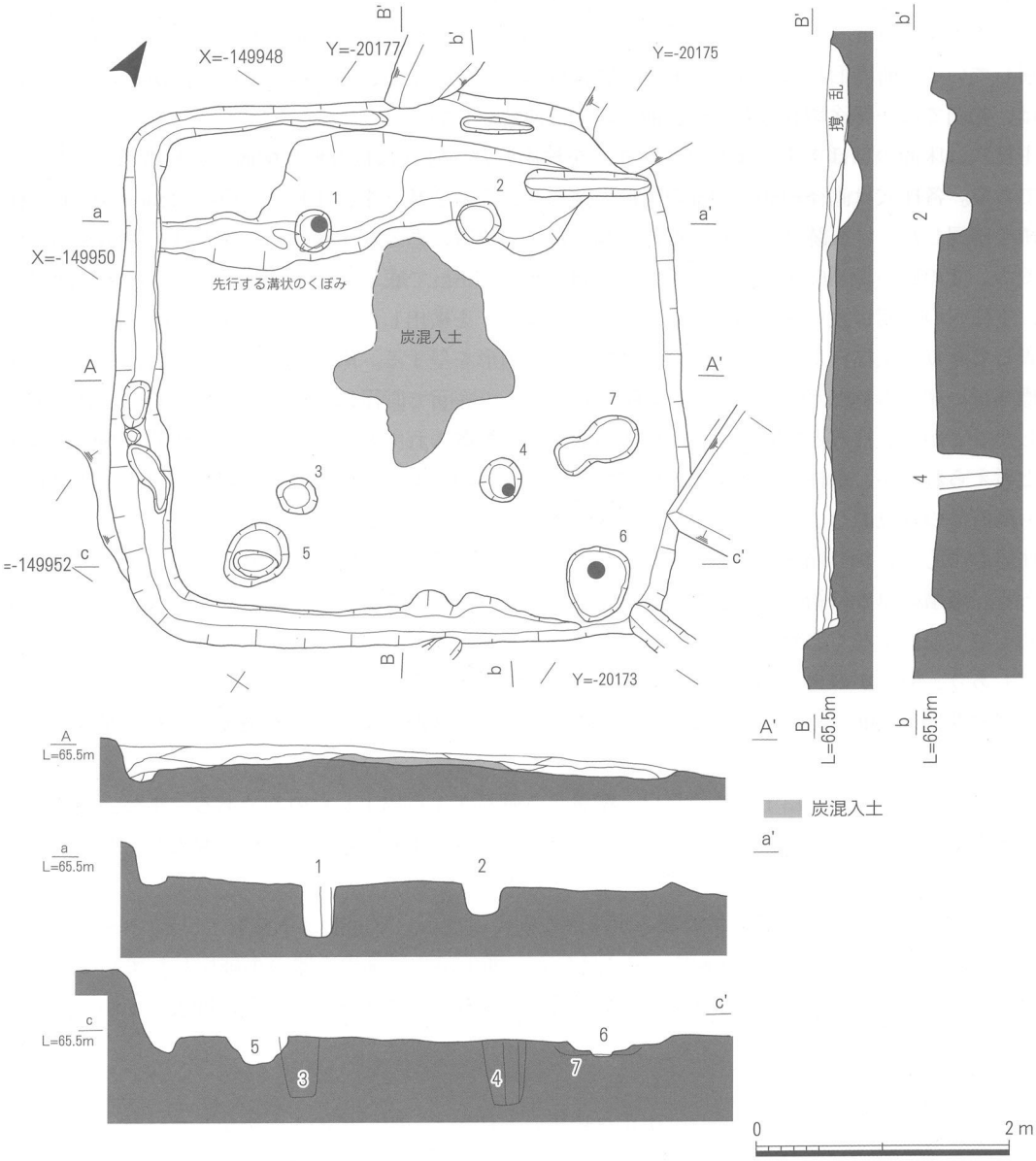


図９．竪穴住居１平面図・断面図（1/50）

いることから、こちらの住居の方が新しい。北半の一部が後世に削平されている。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は4.3×4.5mである。東辺が北で西に約39度ふれる方位をとる。地山を掘り込んで壁としており、深さは最も残りの良い南側で最大約50cmあるが、北側では約10cmである。南側の壁の傾斜角度は約25度である。床面の標高は65.1～65.3mで自然地形の傾斜に沿ってやや傾斜している。また、床直上には、異なる土を人為的に入れた痕跡が認められないことから、住居掘形の底をそのまま床面として利用したものと考えられる。

番号	長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)	埋土	柱痕跡
1	32	46	64.82	黄褐色土ブロック多く含む褐色土	有(長径10cm)
2	34	22	65.02	黒褐色土粒多く含む褐色砂質土	
3	40	46	64.95	黄褐色土粒多く含む黒褐色土	
4	32	50	64.81	黄褐色土ブロック多く含む褐色土	有(長径10cm)
5	50	20	65.18	赤褐色砂質土（しまり悪い）	
6	60	12	65.17	黒褐色土粒多く含む褐色砂質土	有(長径15cm)
7	67	6	65.14	黒褐色土粒多く含む褐色砂質土	

表３．竪穴住居１床面検出遺構一覧

壁溝が住居の壁に沿って巡っており、斜面の高位にあたる３辺で検出した。上幅約15cm、下幅10cm。床面からの深さは５～10cm、溝底の標高は65.2～65.3mで、いずれも斜面の低位に向かって緩やかに傾斜している。断面形状は逆台形である。底は概ね平らであるが、西辺の一部に凹凸がみられる。各辺は、北側では一部途切れるものの、他の辺では連続している。

主柱穴は床面のほぼ中央で４基（１～４）を検出した。柱穴は長方形に配置し、柱間は約1.3～2.1mである。各柱穴は直径約30～40cmの円形の掘形で、うち２基（１、４）では直径約10cmの円形の柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘形の端に寄った位置にある。床面からの深さは、約20～50cmであるが、２の底が標高65mであるのを除くと概ね標高64.8mで底となっている。また、住居の南辺側で、主柱穴の外側に浅い窪み状のピット２基（５、６）を検出した。いずれも住居の隅に近い場所に位置しており、主柱穴よりもやや広い直径約50mの円形を呈する。床面からの深さは約10～20cm、底の標高はいずれも約65.2mである。南東側のピット６の底面で直径15cmの円形の柱のあたり痕跡を確認したことから、柱穴と判断できる。住居の隅角部に配置されており、当住居と有機的に関係する柱穴と考えられるが、主柱穴との関係や構造については不明である。また、この隅角部の柱穴は地形的にも高所にのみ位置しており、注意しておきたい。

住居の中心で、約1.4m×1.7mの範囲で、炭が密に混入する土の堆積を検出した。平面形は不整形である。堆積の厚さは約５cmで、遺物を含まない。この土を除去した直下においても、床面の状況は周囲と全く差異がなく、熱を受けた痕跡などはなかった。位置的に、炉などの施設があっても良い部分でもあり、何らかの火所であったのだろうか。

住居の埋土は斜面の高位から、緩やかに埋没していった状況を呈する。廃絶後、自然に埋没したものと考えられる。

遺物は床面直上からは出土していない。壁溝から砥石が１点出土したのみである。また、埋土からも石鏃１点と少量の弥生土器小片が出土したのみである。いずれも埋没の過程で混入したものと考えられる。

住居の北部には、先行する溝状の窪みが東西方向にのびる。平面形は不整形で、幅0.3～１m、長さは3.4mである。深さも５～10cmで一定ではない。埋土からは弥生土器の小破片がわずかに出土しているが、詳細な時期や機能を判断できない。北側の主柱穴はこの窪みが完全に埋没してから掘り込まれている。

竪穴住居２（図10）　本調査区のほぼ中央で検出した住居で、竪穴住居１と重複している。竪穴住居１に先行し、南東部が住居１による削平を受けている。また、北西隅部は調査区外にひろがる。斜面地につくられた住居であり、検出面の標高は65.3～66.1mである。各所に後世の改変がみられるもの

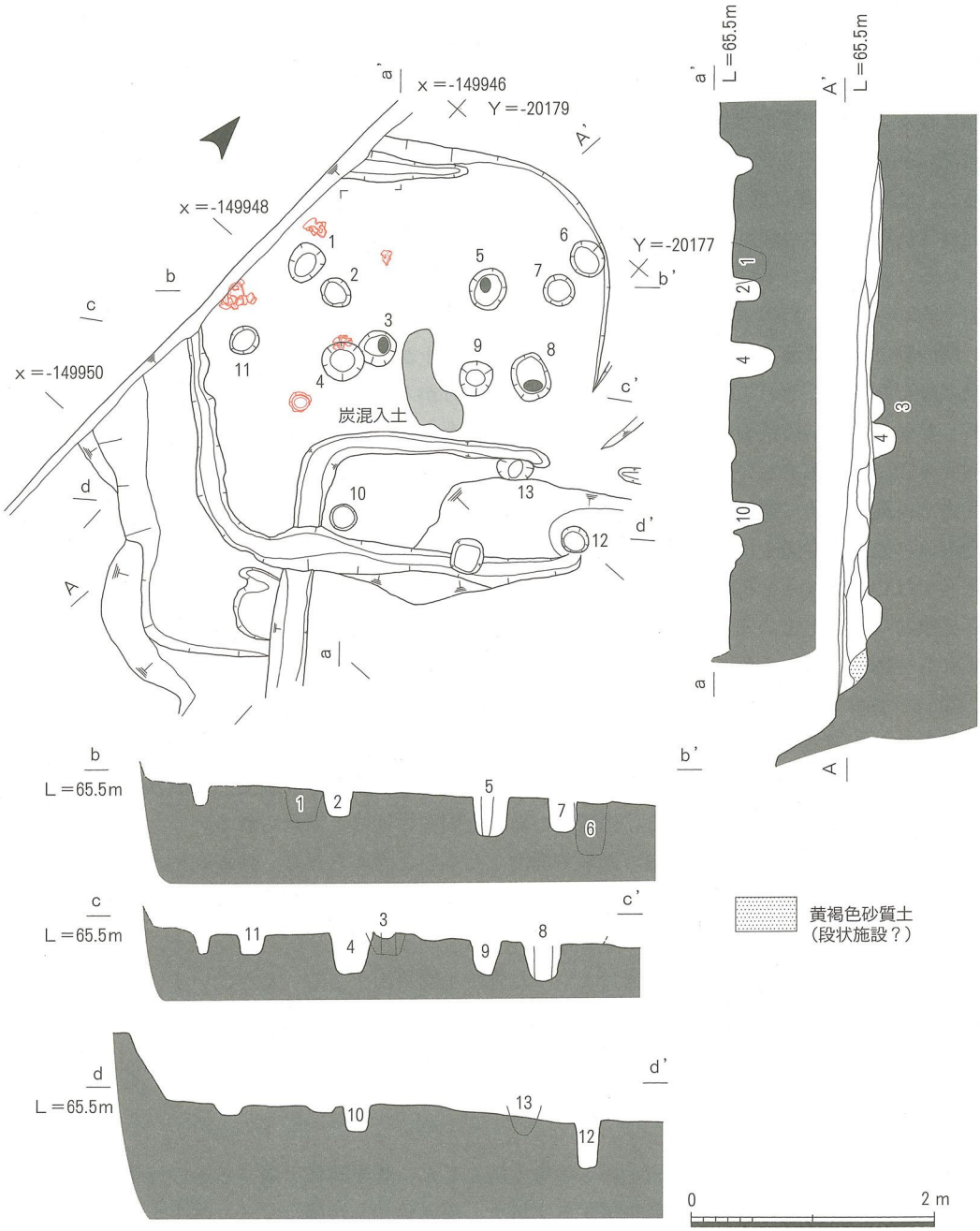


図10. 竪穴住居２平面図・断面図（1/50）

の残存状況は比較的良好である。

平面形は隅丸方形を呈する。検出当初は、住居の南辺の上部が一部削平を受けていることや、北東隅部がゆるい弧を描いてカーブすることから、やや不整な円形を呈するものと判断していたが、残存状況の良い住居壁の下部によると方形と判断できる。規模は４×4.5m。西辺が北で西に約46度ふれる方位をとる。地山を掘り込んで壁としており、検出面からの深さは、斜面の高位である南側で0.8m、低位である北側では５㎝である。最も残りの良い南辺の壁によると、壁の傾斜角度は約40度を測

る。床面の標高は65.2～65.4mで、住居1と同様、自然地形の傾斜に沿ってわずかに傾斜している。また、住居掘形の底が直接床面になることも住居1と共通する。

壁溝は東辺を除く3方向を、「コ」字形に巡る。北辺は住居壁に接しているが、西・南辺は住居壁からやや離れた位置に設けられている。各辺における住居壁との距離は西辺で約30～40cm、南辺で約70～80cmとなる。南西隅では、壁溝と住居壁との間に、黄褐色の砂質土が堆積する。この砂質土は、同時期の他の遺構には存在せず、この1画のみで検出された。広がりが不整形で高さも一定でなかったため遺構と判断しなかったが、段状の施設が崩れた痕跡の可能性もある。壁溝は幅約12～20cm、床面からの深さは約5～10cmと一定でないものの、底面が斜面の傾斜と同じ方向に向かって傾斜している。各辺は調査区内では途切れずに連続しており、東辺は当初から存在していなかったと考えられる。また、壁溝の南辺は、先述の住居1に先行する溝状の窪みの埋土を除去して検出される。

番号	長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)	埋土	柱痕跡
1	32	30	65.05	黄褐色土ブロック多く含む暗褐色土	
2	24	20	65.11	黄褐色土ブロック多く含む褐色砂質土	
3	29	16	65.16	暗褐色砂質土	有(長径12cm)
4	33	30	65.02	黄褐色土多く混入する褐色砂質土	
5	32	31	64.96	黄褐色土ブロック多く含む暗褐色土	有(長径9cm)
6	31	45	64.76	黄褐色砂質土多く混入する暗褐色砂質土	
7	25	26	64.97	黄褐色土ブロック多く含む暗褐色土	
8	39	22	64.94	暗褐色砂質土	有(長径18cm)
9	28	30	64.96	暗褐色土	
10	22	27	65.08	黄褐色土ブロック含む暗褐色砂質土	
11	23	18	65.16	黄褐色土ブロック多く含む暗褐色砂質土	
12	22	43	64.78	黄褐色土ブロック含む暗褐色砂質土	
13	30	18	65.08	黄褐色土粒含む褐色砂質土	

表4．竪穴住居2床面検出遺構一覧

床面では13基のピットを検出した。各ピットは直径25～40cmの円形のもので、3基（3、5、8）から柱痕跡を検出している。床面からの深さは16～45m、底面の標高は64.8～65.16mと一定でない。いずれも柱掘形と考えられるが、配置に規則性を見出せない。中には重複しているものもあることから、同一の場所で建替えがおこなわれたものと判断できる。壁溝が住居壁から離れていることも、この建替えによるものであろう。

住居の中央には、住居1と同様に炭を含む土が堆積していた。厚さ5cmで、範囲は住居1より狭い30×80cmで、平面形は不整形である。住居1のものと同様の性格と考えられる。

住居の埋土は、概ね住居1と同様の過程で埋没したものと考えられる。積極的に人為的な埋没を肯定できる堆積状況はなく、斜面の高位から次第に自然埋没したものと判断できる。これらの埋土には弥生土器の小片がわずかに含まれるのみである。

床面直上からは台付甕、甕、壺、器台といった弥生土器が出土しているが、いずれも完形にはならない。廃絶直後に投棄されたものと考えられるが、その配置は住居の使用時と有機的に関連するものではないだろう。

(2)その他の遺構（図11）

検出した遺構の中で長径が50cm以上のものを土坑とした。弥生時代に属するものは2基である。

土坑8　平面形が長径約60cmの円形を呈する土坑で、深さ約10cmが残存する。弥生土器の小片を多く含むが、残存状況が悪い。埋土は黒褐色土である。

土坑27　平面形が直径約50cmの円形を呈する土坑で、深さ26cmが残存する。大部分が近代以降の撹乱によって破壊されている。埋土は2層で、上層が黒褐色砂質土、下層が黄褐色土を含む灰黄褐色土である。上層から弥生土器高杯1点が出土した。他の土坑出土土器と比べて残存率が高く、当初からこの高杯1点のみを埋納したものであったのだろう。

調査区のほぼ中央でⅢ層の除去後に検出した溝は4本である。いずれも幅が狭く直線的であることから住居などの施設の一部が残存したものである可能性もある。

溝28　幅約30cmのほぼ東西方向の溝で、長さ1.3mを検出した。東西両端が後世の削平を受けている。

深さは約10㎝で断面形状は逆台形を呈する。埋土は炭を少量含む黒褐色砂質土（上層）と褐色砂質土（下層）。弥生土器壺が１片出土した。

溝42　幅約20～50㎝のほぼ南北方向の溝で、長さ2.2ｍを検出した。南端を後世の撹乱に、北端を住居１によって削平されている。断面形は逆台形で深さは約10㎝である。溝底の標高は65.5～65.7ｍで、自然傾斜と同じ方向に緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色砂質土。遺物は弥生土器の細片がわずかに出土したのみである。また、遺構完掘後に直径50㎝の土坑を検出した。土坑の深さは約30㎝で埋土は黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

溝50　幅約30～40㎝のほぼ直角に屈曲する溝で、長さ1.3ｍを検出した。検出面からの深さは最も深い南側が20㎝で、斜面の低位に向かって深さを減じていき、北側では流失している。断面形は逆台形状で埋土は炭をわずかに含む暗褐色砂質土。遺物は少量で弥生土器小片、石鏃が出土した。

溝52　幅約30㎝の直線的な溝で、長さ1.2ｍを検出した。西端を住居１により削平され、東端は調査区外へのびる。深さ約20㎝で、断面形がほぼ方形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は弥生土器小片が少量出土した。

検出した遺構の中で長径が50㎝に満たない円形のものをピットとした。大半は遺物が出土せず、深さが10ｍ程度のものである。溝42と溝28に囲まれた位置で検出したピット40・41は、直径約30㎝、検

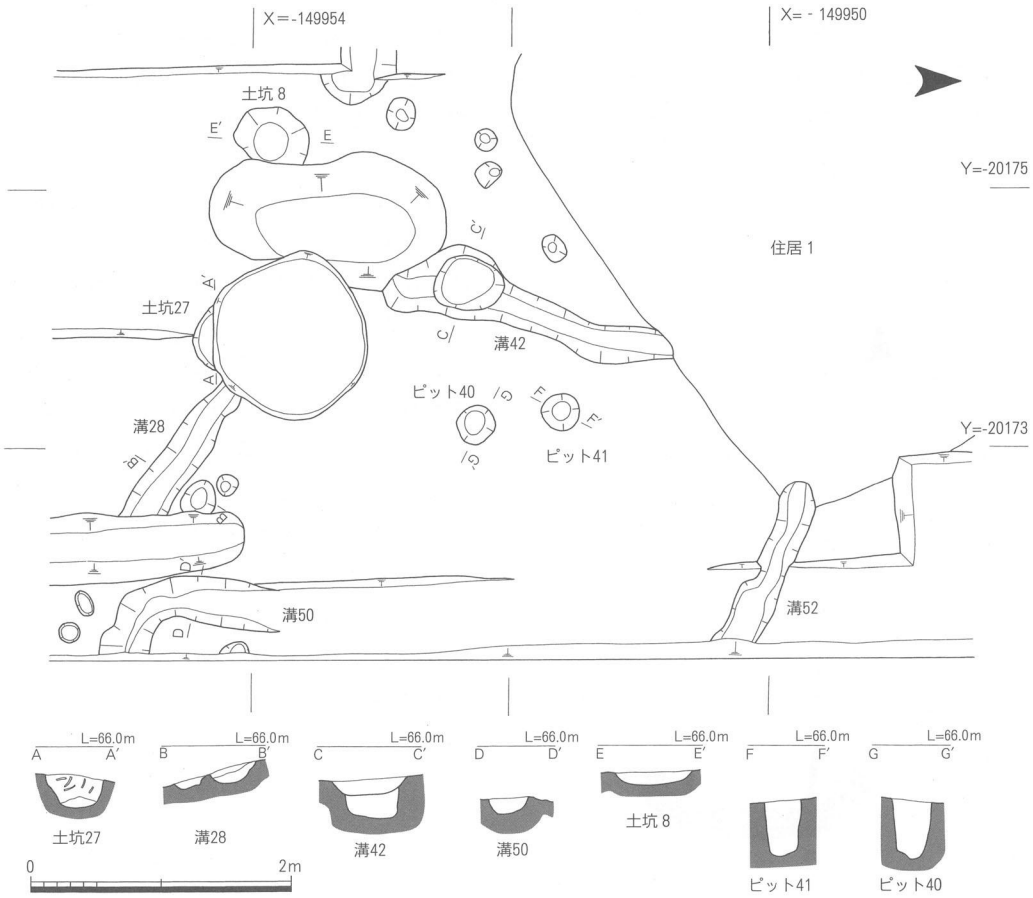


図11. 弥生時代の溝、土坑平面図・断面図（1/50）

出面からの深さ約40㎝、底面の標高65.1mと、ほぼ同様の大きさを呈するもので、埋土はいずれも暗褐色粘質土である。この2基については、他のピットと異なり、深さがあり、平面形もきれいな円形を呈することから、柱痕跡は検出されなかったものの、上部が流失した住居に伴う柱穴の可能性がある。

ⅲ　近世の遺構

調査区内で検出した遺構の多くが近世に属すると考えられるが、遺物が出土し、確実に当該時期に属すると判断できる遺構には埋甕と貼石遺構がある。

埋甕（図12）　住居1の上に堆積するⅠ層の上面で検出した。長径62㎝、短径54㎝のやや不整な円形を呈する掘形に、瓦質土器の甕を逆位に埋設している。遺構の上半が削平を受けており、検出面からの深さは26㎝である。掘形の底部径は甕の直径とほぼ同じである。甕の外側の埋土は赤褐色土を多く混入する粘性のきわめて強い暗褐色土で、甕を固定するために意識的に選択された土と考えられる。甕内の埋土は上下2層あり、上層が黒褐色砂質土、下層が赤褐色粘質土である。各層は10㎝の厚さでレンズ状に堆積している。これらは後世の流入土と考えられる。遺物は甕以外には甕の内外問わず全く出土せず、甕底部付近の破片も出土していない。

貼石遺構（図13）　試掘確認調査の2トレンチで検出した遺構で、本調査区の西方に位置する。幅1.5～1.9m、深さ45㎝の断面逆台形状の溝状遺構で、西肩は後世に大きく改変されている。東法面に貼石を施している。貼石は7～13㎝大の扁平な川原石を用いる。扁平な面を斜面と意識的にそろえており、最も残りの良い部分で5段が残存している。石材の長軸が横位になるように設置されているが縦・横それぞれの目地の通りはあまり明瞭でなく、石材の大きさや斜面の傾斜に規制されながら敷き詰めている状況である。

掘形底面の東際には、瓦質の土管を連結した暗渠状施設がある。土管の上面のレベルは残存する貼石の最下段よりも低く、当初は土管を覆う形で貼石が施されていた可能性もある。土管は長さ20㎝大のものを連結し、設置の際に極めて粘性の強い灰黄褐色土を掘形に詰め込んでいる。土管の固定と、漏水の防止を目的として意識的に入れられた土と考えられる。同様の土は貼石の裏側にも充填されている。貼石の上面以上の埋土は廃絶後に堆積したものと考えられるが、瓦質土器甕の破片が少量出土したのみで、顕著な遺物出土状況はみられない。この遺構の機能や性格は不明である。

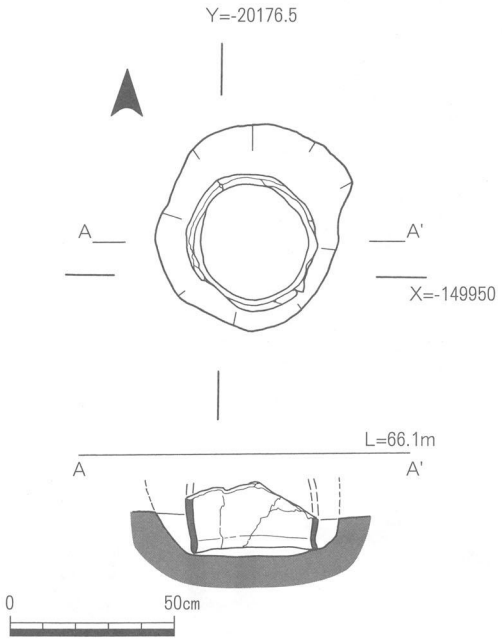


図12. 埋甕平面図・断面図（1/20）

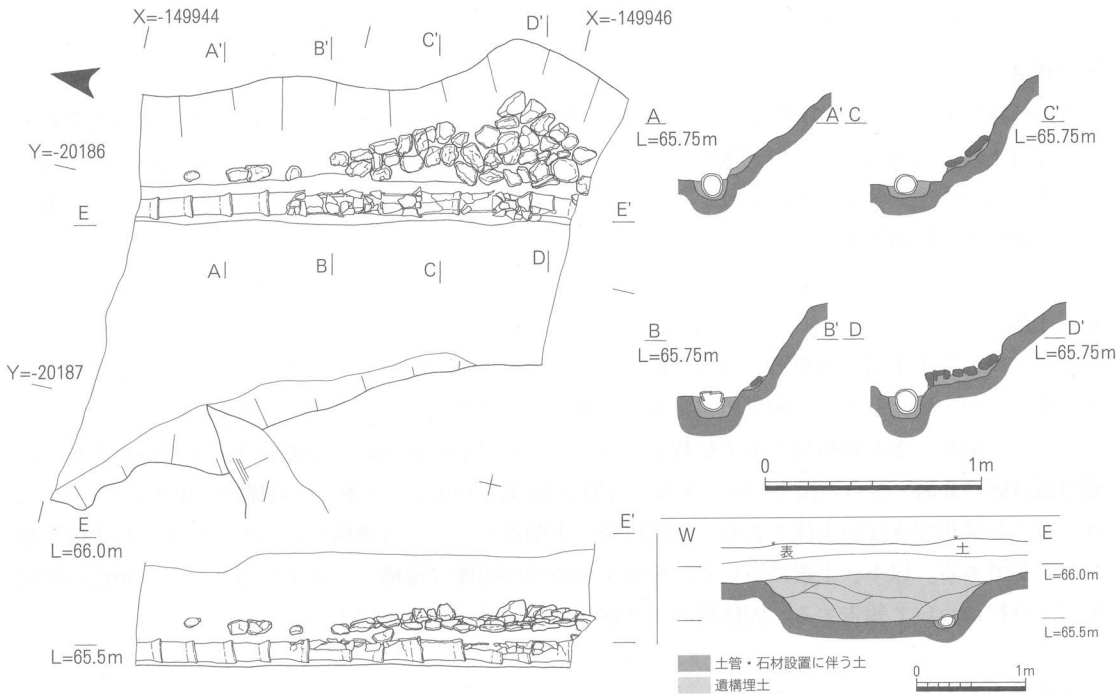


図13. 貼石遺構平面図・立面図・断面図（1/30）※断面図のみ1/60

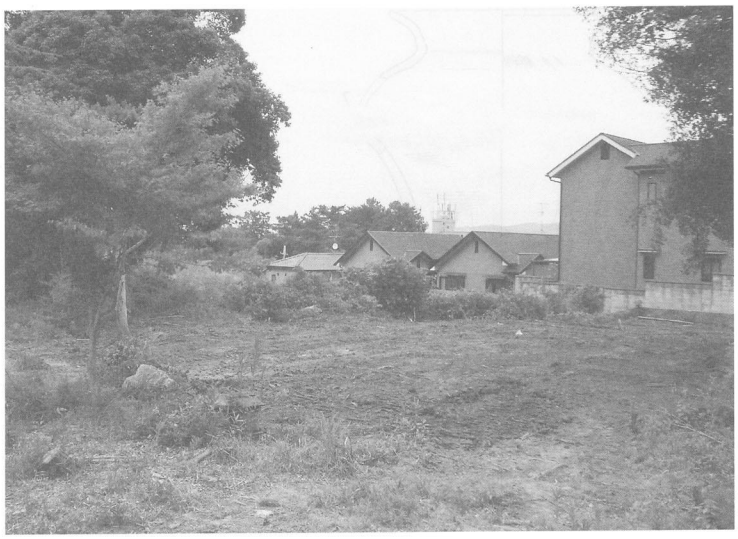


写真１．調査地近景（埋め戻し後、南西から）

第3節　遺物

i　概要

遺物は整理用コンテナで19箱分出土した。出土遺物の内容は弥生土器、須恵器、近世以降の土師器・瓦、瓦質土器、石器である。出土遺物の大部分を占めるものは弥生土器である。近世以降の遺物は造成土中からの出土が多い。本節では、土器、土管、石器に項を設けて、それぞれの項の中で出土遺構および層位ごとに報告する。

ii　土器

土器には、弥生土器、須恵器、瓦質土器、近世以降の土師器がある。弥生土器の大部分は遺物包含層（Ⅲ層）から出土したが、後世の包含層や遺構中にも混入している。すべて残存状況が悪く、破片も小さい。図化できた資料数も出土総数から比べるとわずかしかない。須恵器は出土量がわずかで、遺物包含層（Ⅱ層）からの出土のみである。瓦質土器は、土坑などの多くの遺構から出土しているが、ほとんどが図化できない小片である。近世以降の土師器については遺構からの出土がみられず出土量もわずかである。以下、土器について、帰属する時期が明確な遺構から出土したものと、層位の年代を示す資料について報告する。固体個別の詳細な計測値等は観察表にまとめる。

(1)遺構出土土器

竪穴住居1（図14）　弥生土器高杯、器台、壺、底部片がある。全て破片資料である。1・2は高杯脚部である。1は中空で、2は上端部が中実である。いずれも杯部との接合部分で剥離している。2は外面に縦方向のミガキを密に施す。裾部は不明であるが、どちらも破断面以下で屈曲して外反する

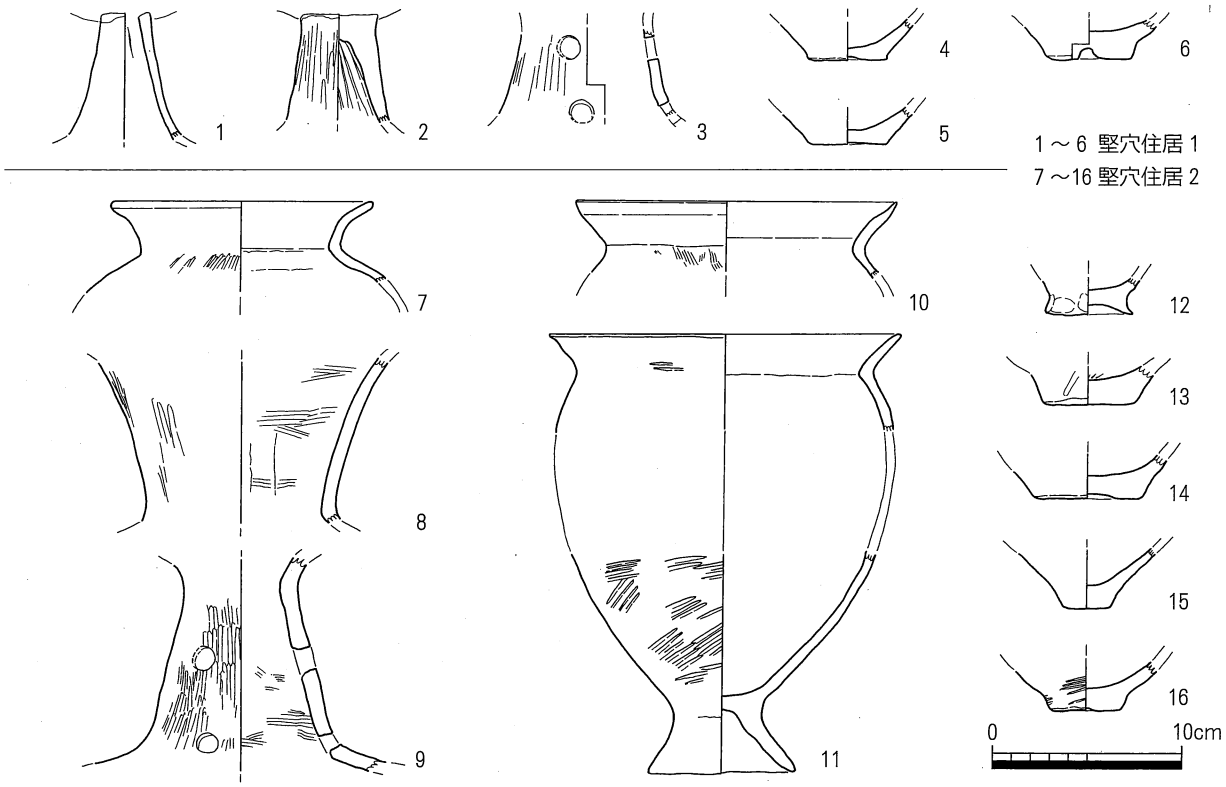


図14. 竪穴住居1・2出土土器（1/4）

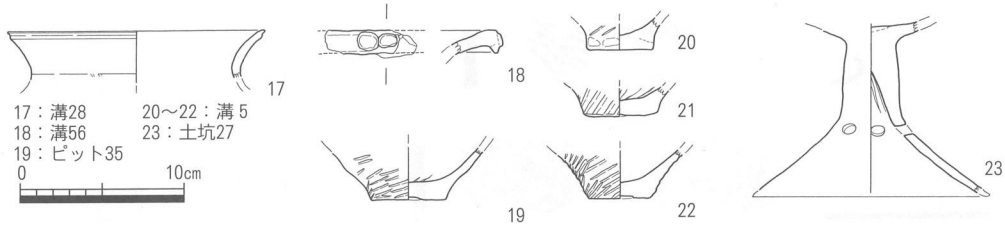


図15. 溝、土坑出土土器（1/4）

ものと思われる。３は器台である。２段の円形の透かしをもつ。外面に縦方向のミガキを施す。４、５は底部破片で、甕の底部と考えられる。平底の底部からやや直線的に外方にひろがる。６は壺の底部である。やや突出した底部で、底面の中央に凹みをもつ。

竪穴住居２（図14）　弥生土器壺、甕、台付甕、鉢、器台がある。７は広口壺で、外反する短い口縁部をもつ。体部外面はミガキ。内面はナデで粘土紐痕跡が残る。８は広口長頸壺で、頸部のみが残存する。頸部は緩やかに外反しながらのびる。外面は縦方向のミガキ、内面は板状の工具でナデ。９は器台である。下方に向かってやや広がる体部に外方に屈曲する裾部と口縁部をもつ。体部の中央から下半に円形の透かしを２段配置する。外面は縦方向のミガキ、内面はハケの後、全体を丁寧にナデ。10は甕である。口縁部のみの残存で、端部は内湾して鋭く仕上げる。11は台付の甕で、台部は中空でやや外反し、口縁部は直線的に外方にひろがる。体部外面をタタキ、内面はナデ。台部はナデで、体部との境に粘土紐痕跡を残す。12は鉢底部で、上げ底の底部をもつ。13～16は底部片である。13はやや突出した平底の底部で、外面にはミガキがわずかにみられる。14は平底の底部からやや直線的に外方に広がる破片で、甕と思われる。15は小さく突出した平底の底部。16は突出した平底の底部で、内湾する体部下半をもつ。外面にはタタキがみられる。

その他の遺構（図15）　溝28には弥生土器甕（17）がある。口縁部の一部のみの残存で、ゆるく外反する口縁部で端部外面に凹状の面を１条有する。溝50には端部小片（18）がある。端部の下半をひろげることで広い面を設け、面には円形浮文を施す。浮文は粘土塊を貼り付ける。壺か器台の口縁端部と考えられる。溝５は近世以降の遺構であるが、弥生土器のみが出土した。20～22は底部片である。20は短く突出する平底で、21、22はやや突出する平底である。22は底面の中央に浅い凹みをもつ。外面はいずれも右上がりタタキであるが、20のみ底部に指頭圧痕が残る。土坑27には弥生土器高杯（23）がある。脚部のみの残存で、外方に屈曲する裾部をもつ。脚頂部をそのまま杯底面とする。屈曲する部分に円形の透かしを３方に配置する。

埋甕（図16）　瓦質土器甕（24）がある。口縁端部が肥厚し、下方に傾く面をもつ。底部は欠失。外面は調整が不明瞭だが、内面に指頭圧痕が残る。

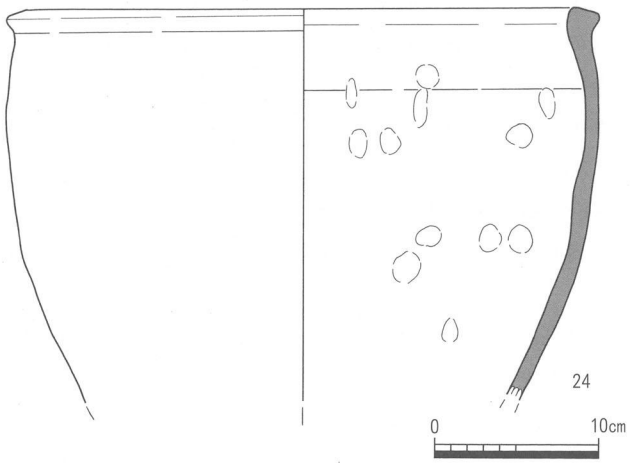


図16. 埋甕出土土器（1/4）

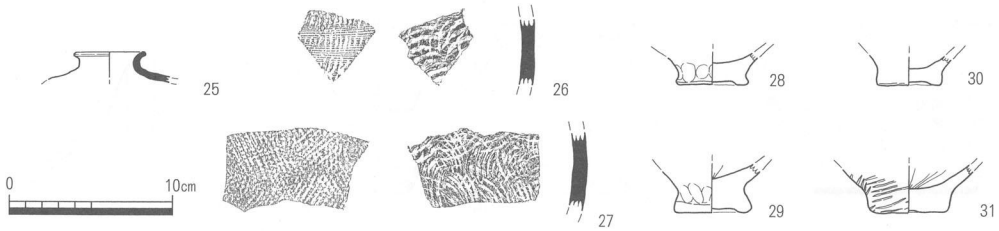


図17. 包含層（Ⅱ層）出土土器（1/4）

(2)包含層出土土器

Ⅱ層出土遺物（図17）　須恵器壺、甕、弥生土器底部がある。25は須恵器壺である。短く外方に屈曲する口縁部に、大きく張り出す肩部をもつ。内外面共に回転ナデ。26、27は須恵器甕の体部の一部である。いずれも内面には当て具痕、外面には格子タタキ。26は外面に更にカキメ調整をおこなう。28～31は弥生土器底部である。28、29は鉢の底部で、短い脚部をつまみ出して成形し、外面には指頭圧痕が残る。29の内面にはシボリ痕跡がある。30はやや突出する上げ底状の底部である。31は突出する平底の底部で、底面中央には浅い凹みをもつ。外面は右上がりタタキ、内面にはシボリ痕跡がある。甕の底部。

Ⅲ層出土遺物（図18・19）　弥生土器壺、甕、鉢、高杯がある。32～34は壺の口縁部である。32は外反する口縁部の端部を内湾させて、受け口状の口縁部とする。33は大きく外反する口縁部をもち、端部を面取りする。34は直線的に外傾する口縁部で端部がやや外反して面をもつ。35～44は甕である。35は外方に屈曲する口縁部で、体部との境が不明瞭である。36～39は外反する口縁部。36は端部をするどく仕上げて、外面には凹面がめぐる。37は端部の面取りをする。いずれも体部との境はあまり明瞭でない。40～44は体部の上半まで残存している。42は内湾する口縁部をもつが、他は外反する口縁部である。体部は43が横方向のタタキである他はすべて右上がりタタキである。40は体部の最大径が口縁部径より小さく、他は体部最大径が口縁部径より大きい。また、42はやや小ぶり。57は甕の底部である。平底。外面は下半が右上がりタタキ、中央付近から横方向のタタキとなる。内面はナデで、底部にはシボリ痕跡がある。

45～67は底部片で、45～56が壺の底部と考えられる破片である。45～47は短くやや外側に盛りあがる突出をもつ平底の底部に体部が球状に広がる破片である。45、46は外面が右上がりタタキ、47は縦方向のミガキ。48、49はやや突出する底部をもつ。底面はきれいな平底ではない。50～56は直線的で大きな突出をもつもので、全て平底である。球状に広がる体部がとりつく。50、51は外面に縦方向のミガキ、50～52は内面がハケ。52の底面中央には浅い凹みがある。54、56は円盤充填法で成形している。58～67は明瞭な突出をもたず、内湾する体部がとりつく底部片で、甕と考えられる破片である。59～61は底面の中央にごく浅い凹みがある。63は上げ底である。調整はいずれも外面が右上がりタタキ、内面がナデ。成形痕跡が観察できるものでは、58が円板すえおき法で、64～67が円板充填法である。

68は高杯あるいは高杯形器台の口縁部で、大きく外反する。接合部分で剥離している。外面は縦方向のミガキ、内面はナデで、口縁端部をヨコナデする。69～74は高杯である。69は杯部。口縁部との境に緩やかな稜をもち、内湾する口縁部で端部がやや外傾する。70～74は脚部。70～73は上端付近が中実で、裾部は屈曲すると考えられる。74は裾部が鋭く屈曲する。70は円形の透かしを1段配する。72のみ脚部中央付近に横方向のミガキを施し、他は縦方向のミガキである。72は脚頂部が杯部の底面

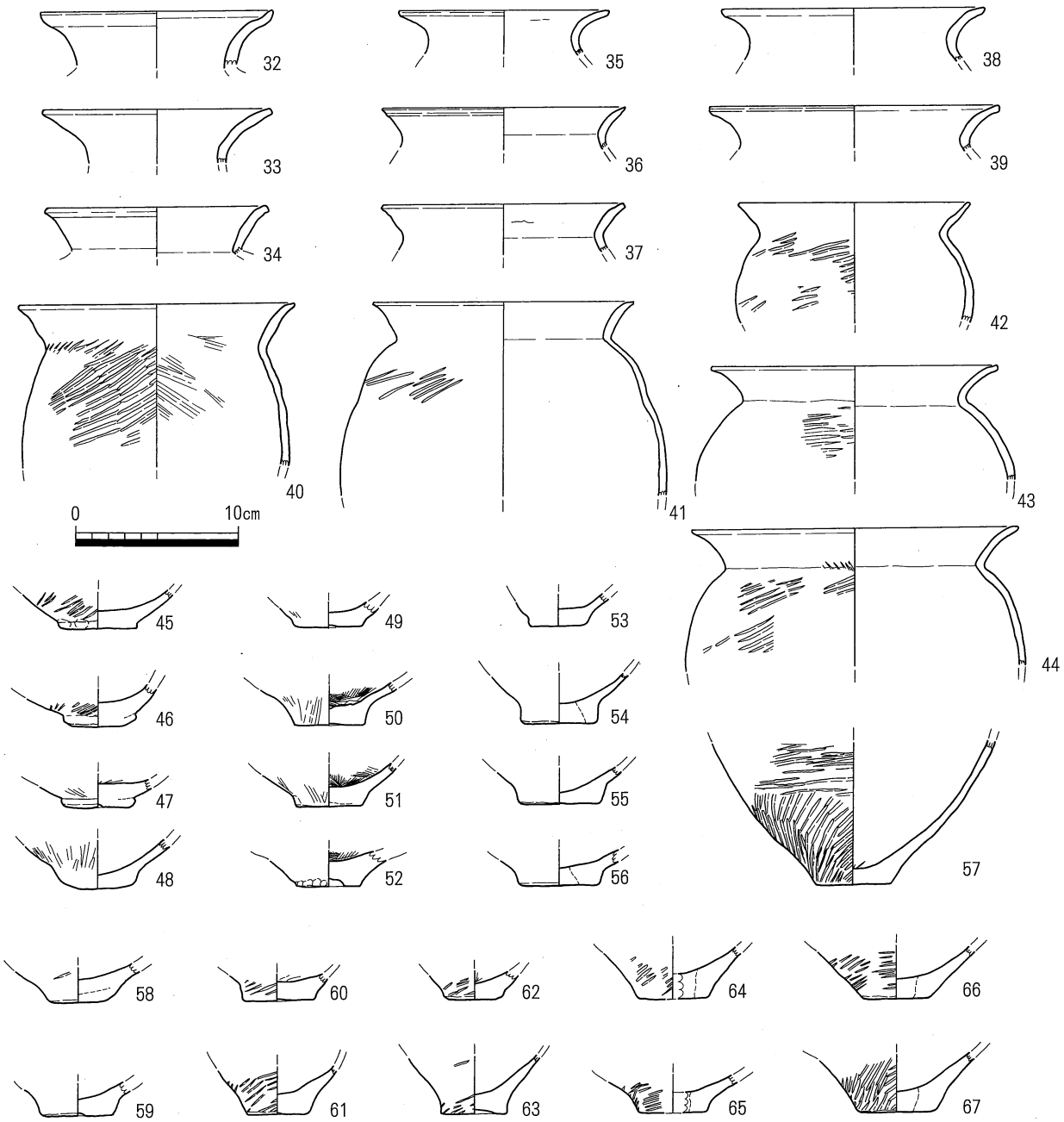


図18. 包含層（Ⅲ層）出土土器①（1/4）

となる。

75、76は鉢で、76は有孔鉢である。いずれも外面を丁寧にナデで仕上げるが、底部付近には指頭圧痕が残る。77～79は突出が無い平底の底部で、体部が直線的に外傾するものである。いずれも底面中央付近をやや上げ底状に仕上げる。内外面共にナデ。80～89は鉢底部である。短く台状に突出する底部で、外面には指頭圧痕が残るものが多い。外面は全てナデ、内面は83、84、89がハケで他は全てナデである。88、89は、底面の突出部を貼り付けた痕跡が明瞭である。

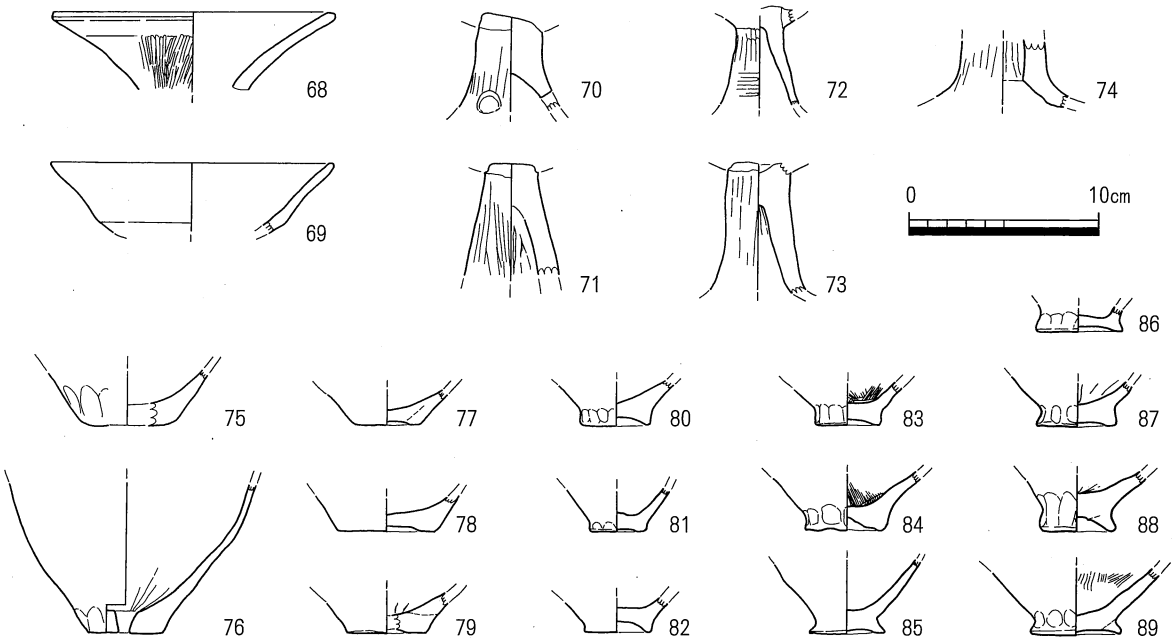


図19. 包含層（Ⅲ層）出土土器②（1/4）

報告番号	器種等	出土遺構・層位	法量cm ()は復元値	胎土	焼成	色調(外)	色調(内)	残存率	形態の特徴	調整等
1	弥生土器 高杯	住居1 埋土	残存高：6.4	0.5～1mmの砂粒 多く含む	良好	7.5YR 8/8 黄橙色	10YR 5/2 灰黄褐色	脚部のみ	杯部接合部で剥離	器表面内外面共に磨耗
2	弥生土器 高杯	住居1 埋土	残存高：5.6	0.5～1mmの砂粒 少量含む 雲母少量含む	良好	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	脚部のみ	杯部接合部で剥離、 頂部が平坦	外面縦方向にミガキ密 内面シボリ
3	弥生土器 器台	住居1 埋土	残存高：4.8	1～4mmの砂粒 少量含む 雲母少量含む	良好	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	体部のみ	円形の透かし2段に配置	外面縦方向にミガキ密 内面ナデ
4	弥生土器 底部（甕か）	住居1 埋土	底径：(4.2) 残存高：1.8	0.5～2mmの砂粒 少量含む	不良	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	底部のみ 3/5	平底	器表面外面磨耗 内面ナデ
5	弥生土器 底部（甕か）	住居1 埋土	底径：(4.2) 残存高：1.9	1～3mmの砂粒 多く含む	不良	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 2/1 黒褐色	底部のみ 2/5	平底	器表面内外面共に磨耗
6	弥生土器 壺	住居1 埋土	底径：4.6 残存高：2.1	0.5～2mmの砂粒 多く含む	良好	5YR 7/6 橙色	7.5YR 8/8 黄橙色	底部のみ 完存	平底、底面中央に凹み	器表面内外面共に磨耗
7	弥生土器 壺	住居2 床面直上	口径13.9 残存高4.8	1～2mmの砂粒 少量含む	良好	5YR 7/8 橙色	7.5YR 8/8 黄橙色	口縁部のみ 完存	緩やかに外反する口縁部、 端部にやや面をもつ	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面縦方向のミガキ、内面ナデ
8	弥生土器 壺	住居2 埋土	残存高：8.5	0.5～2mmの砂粒 少量ふくむ 雲母少量含む	良好	5YR 6/8 橙色	5YR 5/8 明赤褐色	頸部のみ	直線的に外方にのびる頸部	外面縦方向のミガキ 内面板状工具でナデ
9	弥生土器 器台	住居2 床面直上	残存高：11.0	1～2mmの砂粒 少量ふくむ 雲母少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	体部のみ	円形の透かし2段に配置	外面縦方向のミガキ密 内面ハケのち丁寧にナデ
10	弥生土器 甕	住居2 壁溝埋土	口径：(18.0) 残存高：3.7	1～3mmの砂粒 多く含む	良好	7.5YR 8/8 黄橙色	7.5YR 7/6 橙色	口縁部のみ 1/8	短い頸部に端部を鋭く仕上げる、 端部に黒斑	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケ、内面ナデ
11	弥生土器 台付甕	住居2 床面直上	口径：(18.6) 器高：(23.5)	1～3mmの砂粒 含む	不良	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/8 黄橙色	口縁部1/5 台部完存	外方に直線的に短くのびる口縁部 短く開く台をもつ、 体部外面に黒斑	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面右上がりタタキ、内面ナデ 台部内外面ナデ
12	弥生土器 鉢	住居2 埋土	底径：4.7 残存高：1.8	1mm大の砂粒 少量含む	良好	7.5YR 1/3 黒褐色	7.5YR 5/2 灰褐色	底部のみ 完存	台部をつまみだす	外面指頭圧痕 内面ナデ
13	弥生土器 壺	住居2 埋土	底径：4.9 残存高：2.1	1～3mmの砂粒 多く含む 雲母少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	5YR 3/1 黒褐色	底部のみ 完存	平底	外面ナデのちミガキ 内面ナデ、シボリ状の痕跡
14	弥生土器 底部（壺か）	住居2 埋土	底径：5.7 残存高：2.3	1～2mmの砂粒 含む	良好	5YR 7/8 橙色	5YR 7/6 橙色	底部のみ 完存	平底、底面中央に凹み	器表面ない外面共に磨耗
15	弥生土器 底部（鉢か）	住居2 床面直上	底径：2.6 残存高：2.9	0.5～3mmの砂粒 含む	不良	5YR 6/8 橙色	5YR 6/8 橙色	底部のみ	平底	器表面ない外面共に磨耗
16	弥生土器 底部（甕か）	住居2 埋土	底径：(3.8) 残存高：2.6	1～2mmの砂粒 含む 雲母含む	不良	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 3/1 黒褐色	底部のみ 1/4残存	平底	外面右上がりタタキ 内面ナデ
17	弥生土器 甕	溝28	口径：(15.8) 残存高：3.0	1～2mmの砂粒 少量含む	良好	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/6 橙色	口縁部のみ 1/10	緩やかに外反する口縁部、 外面端部が凹状になる	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケ
18	弥生土器 壺か器台	溝50	残存高：1.5	1～4mmの砂粒 少量含む	良好	2.5Y 7/6 明黄褐色	2.5Y 7/6 明黄褐色	小破片	端部が下方に拡張して やや広い面をもつ	円形浮文
19	弥生土器 甕	ピット35	底径：4.5 残存高：2.9	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 8/4 浅黄橙色	底部のみ 完存	平底、底面中央に凹み	外面右上がりタタキ 内面ナデ、特に底部にはシボリ痕跡
20	弥生土器 底部（鉢か）	溝5	底径：(4.2) 残存高：1.6	0.5～2mmの砂粒 多く含む	不良	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/8 橙色	底部のみ 1/4	平底	外面タタキ、底部付近には指頭圧痕跡 内面器表面磨耗
21	弥生土器 甕	溝5	底径：4.5 残存高：1.7	0.5～3mmの砂粒 含む	良好	5YR 6/8 橙色	7.5YR 4/2 灰褐色	底部のみ 完存	平底	外面右上がりタタキ 内面ナデ、特に底部にはシボリ痕跡
22	弥生土器 甕	溝5	底径：3.8 残存高：2.8	0.5～1mmの砂粒 含む	良好	7.5YR 4/1 褐灰色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	底部のみ 1/2	平底、底面中央に凹み	外面右上がりタタキ 内面ナデ
23	弥生土器 高杯	土坑27	残存高：10.4	0.5～3mmの砂粒 多く含む	不良	10YR 8/6 黄橙色	10YR 8/6 黄橙色	脚部のみ	円形の透かし1段3方に配置、 大きく外方に広がる脚裾	外面器表面磨耗 内面シボリ、裾部ナデ
24	瓦質土器 甕	埋甕	口径：36.0 残存高：24.0	0.5～1mmの砂粒 少量含む	堅緻	N 6/0 灰色	7.5YR 3/3 暗褐色	底部のみ 欠失	端部は肥厚して面をもつ	器表面内外面共に磨耗 内面全体に指頭圧痕
25	須恵器 壺	Ⅱ層	口径：(4.4) 残存高：1.8	緻密	堅緻	N 6/0 灰色	N 7/0 灰色	口縁部のみ 1/8	短く立ち上がる口頸部から 外反してまるくおさめる端部	内外面共に回転ナデ
26	須恵器 甕	Ⅱ層	残存高：4.1	緻密	堅緻	N 5/0 灰色	N 5/0 灰色	小破片	体部の一部	外面タタキのちカキメ 内面当て具痕
27	須恵器 甕	Ⅱ層	残存高：3.8	緻密	堅緻	N 5/0 灰色	N 5/0 灰色	小破片	体部の一部	外面タタキ 内面当て具痕
28	弥生土器 鉢	Ⅱ層	底径：4.2 残存高：1.6	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	5YR 7/8 橙色	5YR 7/8 橙色	底部のみ 4/5	平底、底面やや上げ底	外面指頭圧痕 内面ナデ
29	弥生土器 鉢	Ⅱ層	底径：4.0 残存高：1.5	0.5～1mmの砂粒 多く含む	良好	2.5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	底部のみ 3/4	平底、底面やや上げ底	外面指頭圧痕 内面ナデ、底にシボリ状痕跡

表５．土器観察表①

報告番号	器種等	出土遺構・層位	法量cm ()は復元値	胎土	焼成	色調(外)	色調(内)	残存率	形態の特徴	調整等
30	弥生土器 底部	Ⅱ層	底径：4.0 残存高：1.8	1～2mmの砂粒 少量含む	不良	5YR 8/4 淡橙色	7.5YR 8/3 浅黄橙色	底部のみ 4/5	平底、底面やや上げ底	器表面内外面共に磨耗
31	弥生土器 甕	Ⅱ層	底径：4.4 残存高：2.6	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	10YR7/6 にぶい黄橙色	5YR 7/6 橙色	底部のみ 1/2	平底、底面中央に凹み	外面右上がりタタキ 内面ナデ、底にシボリ状痕跡
32	弥生土器 壺	Ⅲ層	口径：(14.4) 残存高：3.4	0.5～1mmの砂粒 含む	不良	10YR 4/1 褐灰色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	口縁部のみ 1/8	緩やかに外反する頸部に 内曲する端部	内外面共にヨコナデ 特に外面を丁寧に仕上げる
33	弥生土器 壺	Ⅲ層	口径：(14.2) 残存高：3.3	1～2mmの砂粒 多く含む	不良	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	口縁部のみ 1/5	短く立ち上がったのち大きく 外反する口縁部、端部は面をもつ	器表面内外面共に磨耗
34	弥生土器 壺	Ⅲ層	口径：(13.8) 残存高：2.9	1～3mmの砂粒 含む 雲母含む	良好	5YR 6/8 橙色	5YR 5/8 明赤褐色	口縁部のみ 1/7	短く外方に直線的にのびる口縁部 端部に面をもつ	内外面共にヨコナデ
35	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(13.0) 残存高：2.6	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	口縁部のみ 1/5	端部に面をもつ	内外面共にヨコナデ
36	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(15.0) 残存高：2.4	1mm大の砂粒 少量含む	良好	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	口縁部のみ 1/10	端部に凹面をもつ	内外面ともにヨコナデ
37	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(15.0) 残存高：2.8	0.5～2mmの砂粒 少量ふくむ 雲母少量含む	良好	5YR 6/8 橙色	5YR 6/8 橙色	口縁部のみ 1/4	端部に狭い面を持つ	内外面共にヨコナデ
38	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(16.2) 残存高：3.1	3～5mmの砂粒 多く含む	良好	7.5YR 8/3 浅黄橙色	5YR 7/6 橙色	口縁部のみ 1/6	端部をまるくおさめる	内外面共にヨコナデ
39	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(17.8) 残存高：2.6	1～2mmの砂粒 多く含む	良好	5YR 7/6 橙色	5YR 7/8 橙色	口縁部のみ 1/12	端部に狭い面を持つ	内外面共にヨコナデ
40	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(17.0) 残存高：10.0	1～3mmの砂粒 少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	口縁部2/5	体部の最大径が口縁部径より小さい	口縁部内外面共にヨコナデ 体部外面右上がりタタキ、内面ハケのちナデ
41	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：16.0 残存高：12.9	2～5mmの砂粒 含む	不良	7.5YR 8/8 黄橙色	10YR 8/6 黄橙色	口縁部3/5	体部の最大径がほぼ中央で、 口縁部径より大きい 体部中央外面に黒斑	口縁部内外面共にヨコナデ 体部外面右上がりタタキ、内面磨耗
42	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(14.0) 残存高：7.2	0.5～1mmの砂粒 少量含む	良好	10YR 8/6 黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	口縁部1/6	体部最大径よりやや小さな口縁部径 内面に黒斑	口縁部内外面共にヨコナデ 体部外面右上がりタタキ、内面ナデ
43	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(17.6) 残存高：7.0	0.5～2mmの砂粒 少量ふくむ 雲母少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	5YR 7/8 橙色	口縁部1/5	体部最大径よりやや小さな口縁部径 端部をまるくおさめる	口縁部内外面共にヨコナデ 体部外面右上がりタタキ、内面ナデ
44	弥生土器 甕	Ⅲ層	口径：(20.0) 残存高：8.5	1～3mmの砂粒 少量含む	良好	5YR 7/6 橙色	2.5YR 6/6 橙色	口縁部1/2	大きく外反する口縁部	口縁部内外面共にヨコナデ 体部外面右上がりタタキ、内面ナデ
45	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：(4.7) 残存高：2.1	0.5～2の砂粒 少量含む	良好	10YR 8/4 浅黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	底部のみ 1/3	平底	外面右上がりタタキ、底部付近指頭圧痕 内面ナデ
46	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：4.5 残存高：2.4	1～3mmの砂粒 含む 雲母少量含む	良好	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 2/1 黒色	底部のみ 完存	平底	外面右上がりタタキ 内面ナデ
47	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：(4.6) 残存高：1.7	1～2mmの砂粒 多く含む	良好	7.5 YR8/6 浅黄橙色	10YR 5/1 褐灰色	底部のみ 1/2残存	平底、底面中央に凹み	外面縦方向ミガキ 内面ハケ
48	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：4.6 残存高：2.6	0.5～3mmの砂粒 含む 雲母少量含む	良好	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 5/1 褐灰色	底部のみ 完存	平底、底部付近外面に黒斑	外面縦方向ミガキ 内面ナデ
49	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：(4.2) 残存高：1.2	0.5～2mmの砂粒 含む	良好	2.5YR 7/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	底部のみ 1/3	平底、底面中央に凹み	外面縦方向ミガキ 内面ナデ
50	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：4.3 残存高：2.2	1～5mmの砂粒 含む 雲母少量含む	良好	10YR 8/4 浅黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	底部のみ 完存	平底、底面中央やや凹む	外面縦方向ハケ 内面ハケ
51	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：4.3 残存高：2.6	0.5～1mmの砂粒 含む 雲母含む	良好	2.5Y 5/2 暗灰黄色	2.5Y 3/1 黒褐色	底部のみ 完存	平底	外面縦方向ミガキ 内面ハケ
52	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：3.8 残存高：2.1	0.5～2mmの砂粒 多く含む 雲母含む	良好	10YR 8/4 浅黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	底部のみ 完存	平底、底面中央に凹み	外面ナデ、底部付近に指頭圧痕 内面ハケ
53	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：(3.7) 残存高：1.7	1mm大の砂粒 含む 雲母少量含む	良好	5YR 8/4 淡橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	底部のみ 1/2	平底	内外面共にナデ
54	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：(4.2) 残存高：3.1	1～3mmの砂粒 多く含む	不良	5YR 5/8 明赤褐色	10YR 4/1 褐灰色	底部のみ 3/5	平底、円板充填法	器表面内外面共に磨耗
55	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：5.1 残存高：2.2	1～2mmの砂粒 多く含む	不良	7.5YR 7/8 黄橙色	7.5YR 6/8 橙色	底部のみ 完存	平底	器表面内外面共に磨耗
56	弥生土器 壺	Ⅲ層	底径：(5.0) 残存高：2.2	1～3mmの砂粒 含む 雲母少量含む	不良	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	底部のみ 1/2	平底、円板充填法	器表面内外面共に磨耗
57	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：4.4 残存高：8.7	1～2mmの砂粒 含む 雲母含む	良好	2.5YR 6/6 橙色	2.5YR 6/8 橙色	底部のみ 完存	平底、体部中程に黒斑	外面下半右上がりタタキ、中程横方向タタキ 内面ナデ、底部にシボリ状痕跡
58	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：3.8 残存高：1.9	0.5～2mmの砂粒 含む 雲母含む	良好	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	底部のみ 4/5	平底、円板すえおき法	外面右上がりタタキ 内面器表磨耗
59	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(4.5) 残存高：1.6	0.5～1mmの砂粒 含む	良好	7.5YR 8/4 浅黄橙色	7.5YR 6/3 にぶい褐色	底部のみ 1/3	平底、底面中央に凹み	外面ナデ 内面器表磨耗
60	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：4.4 残存高：1.7	1～5mmの砂粒 含む 雲母少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/8 黄橙色	底部のみ 完存	平底	外面右上がりタタキ 内面ナデ、底部にシボリ状痕跡
61	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(4.0) 残存高：2.7	1～2mmの砂粒 少量含む	良好	10YR 6/3 にぶい黄橙色	5YR 7/8 橙色	底部のみ 1/2	平底	外面右上がりタタキ 内面ナデ
62	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(3.6) 残存高：1.7	1～2mmの砂粒 少量含む	良好	10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	底部のみ 1/2	平底	外面右上がりタタキ 内面ナデ、底部にシボリ状痕跡
63	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(4.0) 残存高：3.4	1～2mmの砂粒 多く含む 雲母少量含む	良好	2.5YR 6/8 橙色	10YR 4/2 灰黄褐色	底部のみ 3/4	平底、底面やや上げ底	外面右上がりタタキ 内面ナデ
64	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(4.5) 残存高：3.2	0.5～2mmの砂粒 少量含む 雲母少量含む	不良	10YR 8/6 黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	底部のみ 1/4	平底、円板充填法	外面右上がりタタキ 内面ナデ
65	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(4.2) 残存高：2.3	1～2mmの砂粒 多く含む 雲母少量含む	良好	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	底部のみ 1/4	平底、円板充填法	外面右上がりタタキ 内面ナデ
66	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：(4.4) 残存高：2.9	0.5～2mmの砂粒 含む	良好	5YR 6/8 橙色	10YR 4/1 褐灰色	底部のみ 2/3	平底、円板充填法	外面右上がりタタキ 内面ナデ
67	弥生土器 甕	Ⅲ層	底径：4.7 残存高：3.6	1～2mmの砂粒 多く含む 雲母少量含む	良好	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	底部のみ 2/3	平底、円板充填法	外面右上がりタタキ 内面ナデ
68	弥生土器 高杯か器台	Ⅲ層	口径：(15.0) 残存高4.1	0.5mm大の砂粒 少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	口縁部のみ 1/8	外半する口縁部に面をもつ端部、 接合部で剥離	外面縦方向ミガキ 内面ナデ
69	弥生土器 高杯	Ⅲ層	口径：(15.0) 残存高：3.7	1～3mmの砂粒 多く含む	不良	10ＹＲ 8/8 黄橙色	10ＹＲ 8/8 黄橙色	口縁部のみ 1/5	緩やかに内湾する杯部	器表面内外面共に磨耗
70	弥生土器 高杯	Ⅲ層	残存高：5.0	0.5～3mmの砂粒 少量含む 雲母少量含む	良好	2.5YR 7/6 橙色	2.5YR 7/6 橙色	脚部のみ	杯部との接合部から剥離、 接合前の脚部頂は扁平、 円形のすかし1段3方向	外面縦方向ミガキ 内面ナデ
71	弥生土器 高杯	Ⅲ層	残存高：6.7	0.3～3mmの砂粒 多く含む 雲母少量含む	良好	2.5YR 7/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	脚部のみ	杯部との接合部から剥離、 接合前の脚部頂は扁平	外面縦方向ミガキ 内面シボリ
72	弥生土器 高杯	Ⅲ層	残存高：5.3	1～3mmの砂粒 少量含む 雲母少量含む	良好	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	脚部のみ	頂部は杯部との接合部で剥離	外面上部縦方向ミガキ、中程横方向ミガキ 内面上半シボリ、下半ヨコナデ
73	弥生土器 高杯	Ⅲ層	残存高：6.9	1～3mmの砂粒 多く含む	不良	7.5YR 8/6 浅黄橙色	7.5YR 8/6 浅黄橙色	脚部のみ	杯部との接合部で剥離、 接合前の脚頂部は中央凹む	外面縦方向ミガキ 内面上部シボリ、中程より下方ナデ
74	弥生土器 高杯	Ⅲ層	残存高：3.5	0.5～4mmの砂粒 多く含む	良好	5YR 5/8 明赤褐色	5YR 5/8 明赤褐色	脚部のみ	裾部に向かって大きく外方に ひろがる	外面縦方向ミガキ 内面上半シボリ、下半ナデ
75	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：(5.0) 残存高：3.0	1mm大の砂粒 少量含む 雲母少量含む	不良	7.5YR 7/6 橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	底部のみ 1/4	平底、 有孔鉢か	外面底部付近指頭圧痕、体部ナデ 内面ナデ
76	弥生土器 有孔鉢	Ⅲ層	底径：3.8 残存高：7.9	0.5～4mmの砂粒 少量含む	良好	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	口縁部 欠失	平底、 焼成前穿孔	外面底部付近指頭圧痕、体部ナデ 内面ナデ、底部シボリ状痕跡
77	弥生土器 底部（鉢か）	Ⅲ層	底径：(3.6) 残存高：1.9	0.5mm大の砂粒 少量含む 雲母少量含む	良好	7.5YR 7/6 橙色	10YR 4/1 褐灰色	底部のみ 1/2	平底、底面やや上げ底、 底部輪台法	外面丁寧なナデ 内面ナデ

表６．土器観察表②

報告番号	器種等	出土遺構・層位	法量cm ()は復元値	胎土	焼成	色調(外)	色調(内)	残存率	形態の特徴	調整等
78	弥生土器 底部（鉢か）	Ⅲ層	底径：(5.2) 残存高：1.9	1～2mmの砂粒 少量含む 雲母少量含む	不良	5YR 6/6 橙色	5YR 7/8 橙色	底部のみ 1/2	平底、底面やや上げ底	外面器表磨耗、ミガキか 内面器表磨耗
79	弥生土器 底部（鉢か）	Ⅲ層	底径：(4.2) 残存高：2.2	1mm大の砂粒 含む 雲母多く含む	不良	2.5YR 6/8 橙色	10YR 4/2 灰黄褐色	底部のみ 1/4	平底、中底面央やや凹む	外面器表磨耗 内面ナデ、底部シボリ状痕跡
80	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：(3.6) 残存高：2.1	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	2.5YR 7/8 橙色	5YR 7/6 橙色	底部のみ 1/2	平底、底面上げ底	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ナデ
81	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：3.0 残存高：2.2	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	5YR 8/4 淡橙色	7.5YR 8/8 黄橙色	底部のみ 4/5	平底、底面やや上げ底	外面器表磨耗 内面ナデ
82	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：(3.4) 残存高：1.5	0.5～1mmの砂粒 少量含む	不良	7.5YR 8/3 浅黄橙色	5YR 8/4 淡橙色	底部のみ 5/6	平底、底面上げ底	外面器表磨耗 内面ナデ
83	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：3.7 残存高：1.9	1mm大の砂粒 含む 雲母少量含む	良好	7.5YR 8/6 浅黄橙色	7.5YR 8/6 浅黄橙色	底部のみ 完存	平底、底面やや凹む	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ハケ
84	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：4.2 残存高：2.8	1mm大の砂粒 少量含む 雲母多く含む	良好	2.5YR 5/8 明赤褐色	5YR 7/6 橙色	底部のみ 完存	平底、底面中央で上げ底状に凹む	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ハケ
85	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：4.0 残存高：3.7	1～3mmの砂粒 少量含む	良好	10YR 7/4 にぶい黄橙色	5YR 8/4 淡橙色	底部のみ 完存	低い台付	器表面内外面共に磨耗
86	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：4.6 残存高：1.4	0.5～2mmの砂粒 少量含む	良好	5YR 6/3 にぶい橙色	5YR 7/6 橙色	底部のみ 完存	平底、底部上げ底。	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ナデ
87	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：4.3 残存高：2.6	1～2mmの砂粒 含む 雲母少量含む	良好	10YR 8/4 浅黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	底部のみ 完存	平底、底部上げ底	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ナデ、底部にシボリ状痕跡
88	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：4.1 残存高：3.2	1～2mmの砂粒 含む 雲母少量含む	良好	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	底部のみ 完存	低い台付、 台部は円板すえおき法	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ナデ、底部にシボリ状痕跡
89	弥生土器 鉢	Ⅲ層	底径：(4.8) 残存高：3.2	0.5～3mmの砂粒 少量含む	良好	2.5YR 5/1 黄灰色	10YR 6/2 灰黄褐色	底部のみ 3/4	低い台付、 台部は円板すえおき法	外面ナデ、底部付近指頭圧痕 内面ハケ

表７．土器観察表③

報告番号	法量 cm	胎土	色調(外)	色調(内)	焼成	形態の特徴	調整
90	長：19.4 受部径：11.8 継部径：10.1	やや粗	10ＹＲ 5/1 褐灰色	5Y 4/1 灰色	不良	明瞭な境をもって直線的に外方へひろがり、端部に面をもつ受部。 緩やかに外方へひろがり、端部に段をもつ継部。	外面ナデ 内面指頭圧痕
91	長：19.3 受部径：12.6 継部径：9.8	やや粗	Ｎ 8/0 灰白色	Ｎ 5/0 灰色	良好	明瞭な境をもって直線的に外方へひろがり、端部を丸くおさめる受部。 やや外方へひろがり、端部に面をもつ継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
92	長：19.0 受部径：12.0 継部径：10.1	粗	7.5ＹＲ 8/6 黄橙色	10ＹＲ 8/6 黄橙色	不良	緩やかに内湾し、端部をするどく仕上げる受部。 緩やかに外方へひろがり、端部に面をもつ継部。	外面不明瞭 内面指頭圧痕
93	長：19.2 受部径：12.1 継部径：10.5	粗	10ＹＲ 8/6 黄橙色	2.5Y 4/1 黄灰色	不良	明瞭な境をもって内湾し、端部に面をもつ受部。 緩やかに外方へひろがり、端部を丸くおさめる継部。	外面ナデ 内面指頭圧痕
94	長：19.0 受部径：12.8 継部径：10.3	やや粗	10ＹＲ 7/4 にぶい黄橙色	5Y 6/1 灰色	不良	緩やかに外半し、内面に段をもって受け口をつくり、端部に面をもつ受部。 緩やかに外方へひろがり、端部に面をもつ継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
95	長：19.5 受部径：12.9 継部径：10.0	密	5Y 8/1 灰白色	2.5Y 6/1 黄灰色	良好	内外面ともに明瞭な境をもって内湾し、端部に面をもつ受部。 直線的で端部を丸くおさめる継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
96	長：19.1 受部径：12.4 継部径：10.2	粗	5Y 5/1 灰色	5Y 4/1 灰色	不良	内外面ともに明瞭な境をもって外反し、端部に幅の狭い面をもつ受部。 外反し、端部を丸くおさめる継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
97	長：18.2 受部径：11.6 継部径：10.0	密	Ｎ 6/0 灰色	Ｎ 6/0 灰色	良好	屈曲して明瞭な受け口をつくる受部。 外反して内面に段をもつ継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
98	長：18.3 受部径：11.5 継部径：10.0	やや粗	Ｎ 4/0 灰色	Ｎ 5/0 灰色	良好	屈曲して明瞭な受け口をつくる受部。 内面に突出部をもつ継部	外面板ナデ 内面指頭圧痕
99	長：18.9 受部径：12.2 継部径：9.8	やや粗	10ＹＲ 8/4 浅黄橙色	10ＹＲ 8/3 浅黄橙色	不良	屈曲して明瞭な受け口をつくる受部。 直線的で端部を丸くおさめる継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
100	長：18.2 受部径：13.0 継部径：9.8	やや粗	Ｎ 6/0 灰色	Ｎ 5/0 灰色	不良	屈曲して明瞭な受け口をつくる受部。 直線的で端部に面をもつ継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕
101	残存長：15.6 継部径：10.4	やや粗	Ｎ 6/0 灰色	7.5ＹＲ 3/3 暗褐色	不良	直線的で、内面に小さな段をもつ継部。	外面板ナデ 内面指頭圧痕

表８．土管観察表

ⅲ　土管

貼石遺構には暗渠施設状に瓦質土器の土管が連結する施設が伴っていた。土管は調査区外にもさらに連結しながら続いているが、今回の調査では13点を検出した。

図化した土管は12点である（図20）。すべて円筒形の両端部に受部と継部を異なる形態でつくるものである。受部の形態から大きく２群に分類ができる。一つは90～96で、極端に明瞭な境をつくらずに、外方に向かって広がる受部をもつものである。焼成が不良のものが多い傾向がある。また、受部の内面で明瞭な段をつくって受け口状に仕上げる93～96と、緩やかに受部へ移行する90～92とに細分が可能である。もう一つは97～100で、明瞭な屈曲をもって受け口を形成するものである。比較的焼成が良好な傾向がある。継部は緩やかに外方に広がるものが多く、直線的なものは95、99、100と少ない。受部および継部の端部には、丸くおさめるもの、鋭く仕上げるものがあるが、狭い面をもつも

のが多い。法量は大部分が長さ19㎝前後である。受部形態が屈曲して明瞭な受け口をつくるものが、やや小ぶりな傾向がある。受部径は11.5～13㎝、継部径は9.8～10.5㎝と、形態によって若干の差異があるものの、概ね同様の規格を指向しているものと考えられる。

調整は、受部と継部をヨコナデし、体部外面を板ナデあるいはナデ、内面は特に調整せずに指頭圧痕が残る。外から見えない内面には粘土紐痕跡が明瞭に残るものも多い。

このような形態的特長による差異や、焼成の良し悪しは製作者や生産地の違いによるものと考えられる。当初から土中に埋設する前提で製作されており、細かい端部の違いや継部の裾にみられる広がりの程度などは製作工程上で発生した差異を特に修正していないだけの可能性が高い。しかし受部形態の差異は製作当初段階からの意識的なものと考えられ、製作者や生産地の違いを反映している可能性が高い。

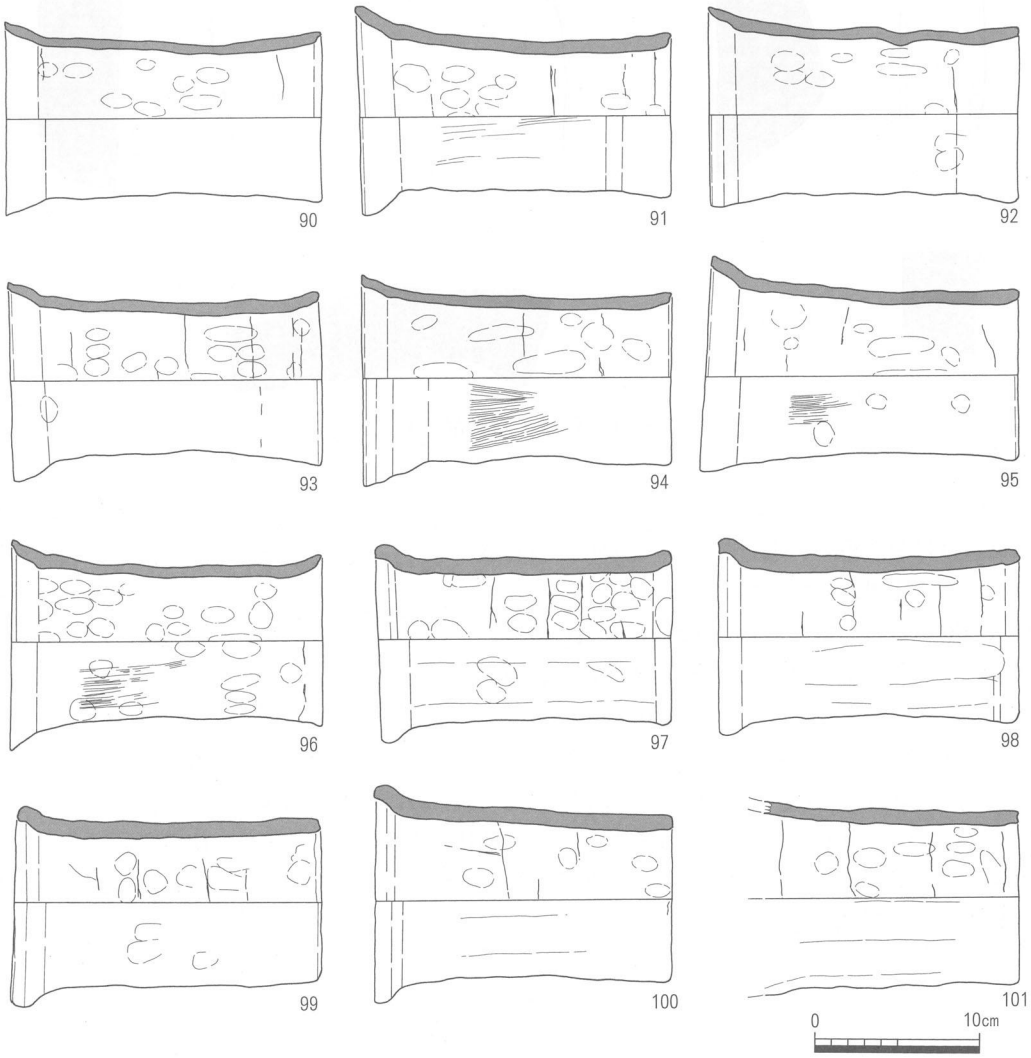


図20. 貼石遺構出土土管（1/4）

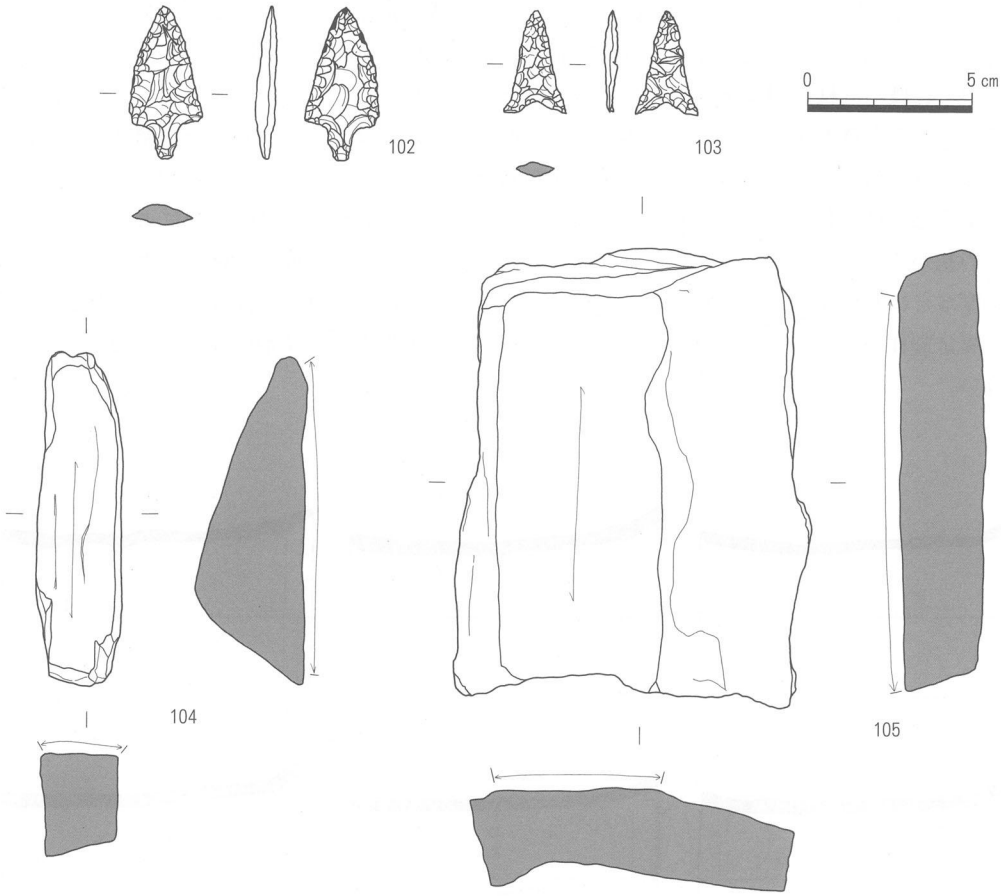


図21. 石器・石製品（1/2）

iv　石器

石器には打製石鏃と、砥石がある（図21）。各石器の寸法等は、計測表を参照されたい。

102、103は打製石鏃である。102は有茎式石鏃で、住居１埋土から出土した。103は凹基式石鏃で、溝50から出土した。いずれもサヌカイト製である。102の刃部が一部折損しているものの、いずれも完形。

報告番号	種類	出土位置	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g
102	打製石鏃	住居1 埋土	サヌカイト	4.7	2.2	0.6	4.7
103	打製石鏃	溝50	サヌカイト	3.1	1.9	0.4	1.3
104	砥石	Ⅲ層	片岩	10.2	2.7	3.3	
105	砥石	住居1 壁溝	流紋岩	13.7	10.3	2.9	

表９．石器計測表

104、105は砥石である。104はⅢ層から出土した。石材は片岩で、一面のみを使用している。105は住居１の壁溝から出土した。石材は流紋岩である。凸状に膨らんだ面の半分に使用痕がある。この面を上面にして据えると非常に安定が良く、据え置いて使用したものと考えられる。他の面は全体的にやや磨耗している。

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査では、小規模な調査面積にも関わらず、郡山城の築城以前及び以後の多くの遺構を検出した。本章では、まず検出遺構及び出土遺物について帰属する時代ごとに概観する。そして、今回の調査でもっとも注目される弥生時代の集落について改めて節を設けて述べる。

第１節　遺構の変遷

弥生時代　竪穴住居をはじめとする多くの遺構を検出した。また、調査区北半には、弥生土器を多く含む遺物包含層である第Ⅲ層が良好に残存していた。

調査区北半の斜面部分で、平面隅丸方形の竪穴住居２棟を重複した状況で検出した。切り合い関係から、竪穴住居２→竪穴住居１の順でつくられたことがわかる。竪穴住居２の床面には完形にはならないものの比較的残存率の良い土器が出土しており、これらの土器から住居廃絶時期の一端を推定することが可能である。土器は大和第Ⅵ－３様式に属するものと判断される。この住居２は、柱穴が重複していることや、壁溝と住居壁との間に空間があることなどから、同一地点での建替え（拡張か）がおこなわれた可能性が高く、出土した土器群が住居造成の時期を示しているものではない。この竪穴住居２の埋土を掘り込んで造成されている竪穴住居１からは良好な状況で遺物が出土していないため、厳密な時期を判断することが困難である。これらの住居の直上に堆積していた遺物包含層である第Ⅲ層から出土した土器は、大和第Ⅵ－３～４様式に属するものである。包含層中の遺物はこの時期のものに限定されていることから、竪穴住居１の廃絶の時期を大和第Ⅵ－４様式の範疇に考えておきたい。また、明らかに時期が遡る遺物が出土していないことから、集落の出現時期についても大和第Ⅵ－３様式内であると考えられ、竪穴住居２の造成時期も同様の時期と判断できる。すなわち、竪穴住居２は比較的短期間の間に建替え、廃絶したものと推定できる。

その他にもⅢ層除去後に小規模な土坑や溝等を検出しているが、これらの遺構も出土遺物から大和第Ⅵ－３～４様式に属するものと考えられる。特に直線状の小規模な溝については、流失した住居に伴う遺構である可能性が高く、当地に短期間のうちに比較的多くの住居が造成されていた可能性を示している。調査地の南半は、後世の改変などにより、遺構・遺物が良好に残存していなかったものの、今回の調査地の南側でおこなわれた第９次調査出土の遺物も同時期のものであり、集落は今回の調査地よりも広く展開していたことがわかる。

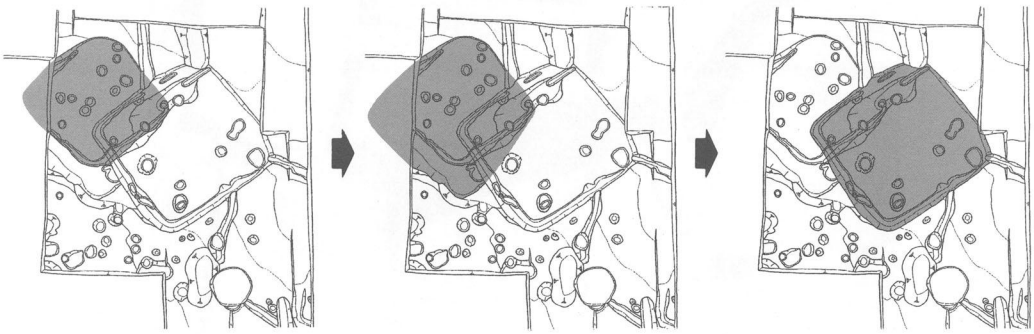


図22　竪穴住居の変遷

奈良時代　遺物包含層である第Ⅱ層からは、混入した弥生土器と共に、奈良時代に属すると考えられる須恵器の小片が出土している。先述の第９次調査では、奈良時代の掘立柱建物が検出されており、第２・４次調査検出の掘立柱建物についても同様の時期に属するものと思われる。今回出土した当該時期の遺物は微量ではあるが、既往の調査で検出した遺構に伴う造成によるものと考えられ、弥生時代の集落が営まれた丘陵の頂部一帯に奈良時代になって再び、建物群を造成したことを示している。また、今回の事業地北半は平城京右京域での「十条」関連条坊施工の推定範囲に相当する。しかし、本調査区以北は近代以降の土地改変が激しく、関連遺構の有無についての成果を得ることができなかった。

近世　近世に該当する遺構の中で、出土遺物から時期の推定が可能であるものには埋甕と貼石遺構がある。これらの遺構は瓦質土器の甕や土管といった詳細な時期を判断するには困難な遺物のみの出土であるが、甕の焼成や土管の成形から17世紀代に属するものと考えられる。貼石遺構は、暗渠状施設を伴うものであり、貼石を施す溝自体が何らかの流排水施設であったと推測される。両遺構ともに、後世の削平によって一部分を残すのみであったのに加えて、調査区の北半が近代以降の造成により改変されていたため、当該時期の遺構配置や当該時期以降の近世の遺構が失われ、当地の利用状況について復元できる資料を得られなかった。ところで、17世紀代の当地の状況を示す絵図として、正保年間（1639～1671）の「和州郡山城絵図」（独立行政法人国立公文書館所蔵）がある（写真２）。絵図では当地に「侍町」と記されている。また、後世の絵図によっても、当地は比較的身分の高い武士の屋敷地として利用されていたことがわかる。大阪夏の陣に伴う、城下の焼き討ちからの復興後に当地が武家屋敷地として整えられ、以後廃城まで幾度かの区割りの変化があるものの、身分の高い武士の屋敷地として利用されたことが推定される。よって、今回の調査で検出した遺構も屋敷地に関わる遺構と考えられ、同様の遺構は本調査区外の南西一帯に残存している可能性が高い。築城の際に周辺における土地の改変があったことは間違いないが、今回の調査区内の斜面部分には、築城以前の遺構が良好に残存していた。このことは、築城の際に当時の丘陵地形をあまり大きく改変せずにそのまま城郭に利用していたことによるものと考えられる。

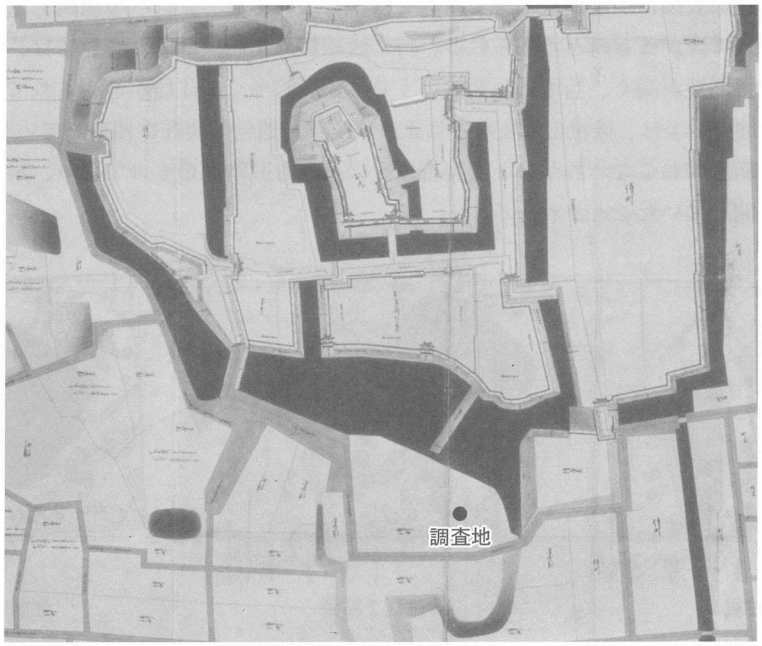


写真２.「和州郡山城絵図」中の調査地周辺

第２節　弥生時代集落について

前節で述べたとおり、今回の調査では、郡山城築城以前の遺構として弥生時代の集落を確認した。集落の時期は、出土遺物より大和第Ⅵ－３様式期に出現し、Ⅵ－４様式期には廃絶したものと考えられる。

既往の調査や歴史的環境でもふれたように、今回の調査地周辺では、遺構こそ確認されていなかったものの、遺物の出土が知られていたことから当該時期に属する集落の存在が推定されていた。しかし、郡山城築城に伴う土地改変が著しいことや、土地利用も頻繁であったことが予想されていたため、遺構が残存していることは考えにくいことでもあった。今回遺構を検出できたのは、当調査地一帯が偶然にも、奈良時代以降の開発が及んでいない範囲だったからである。当地は丘陵の頂部から斜面地へと緩やかに変換する部分であることから、頂部平坦面で繰り返しおこなわれた改変を免れたようだ。

では、この集落はどのような範囲に広がっていたと考えられるのだろうか。図23は現在の周辺地形の等高線を表したものである。これによると、調査地は西ノ京丘陵から派生する東西方向の小さな尾根筋のほぼ先端に位置していることがわかる。築城に伴う改変が自然地形を利用した最小限のもので

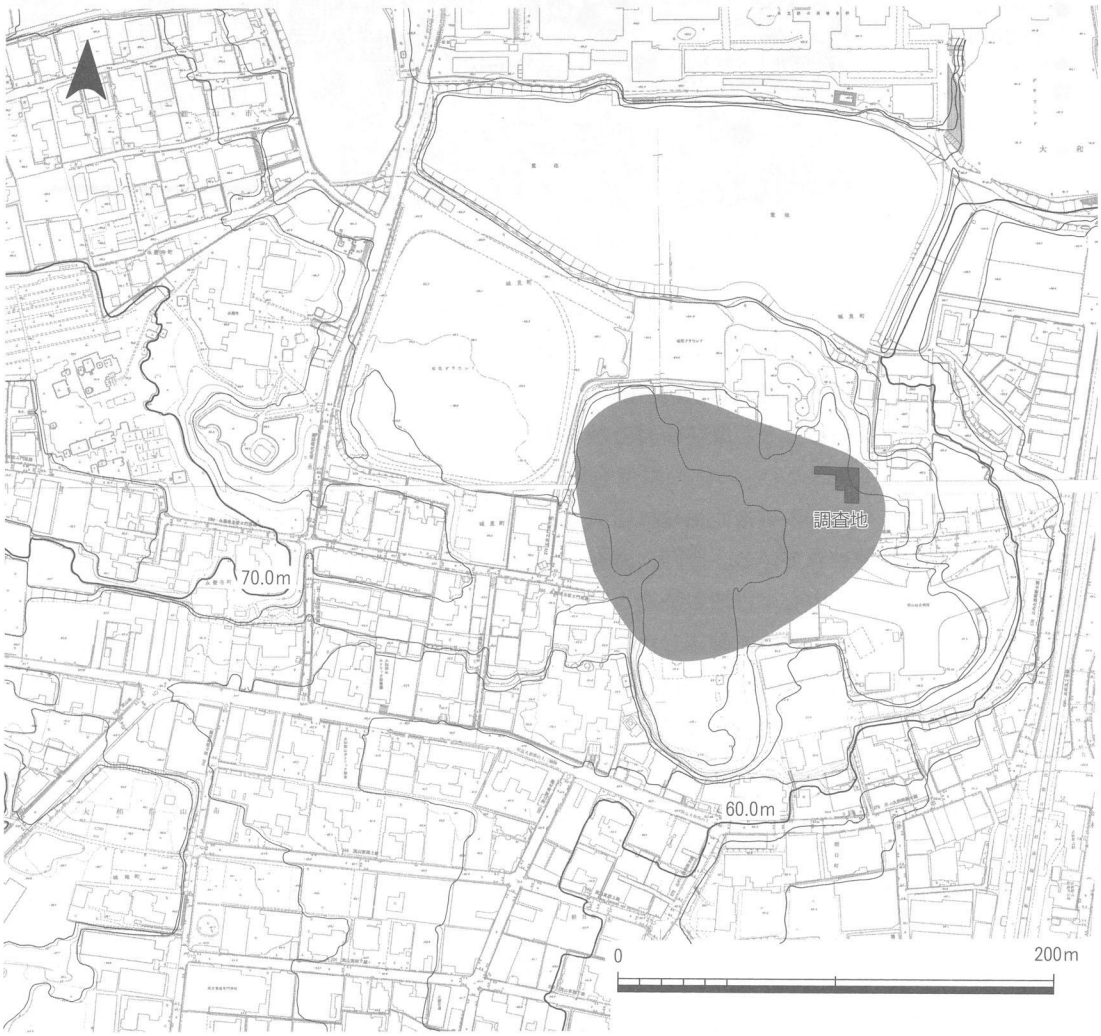


図23. 推定される遺跡の範囲（1/3,000）

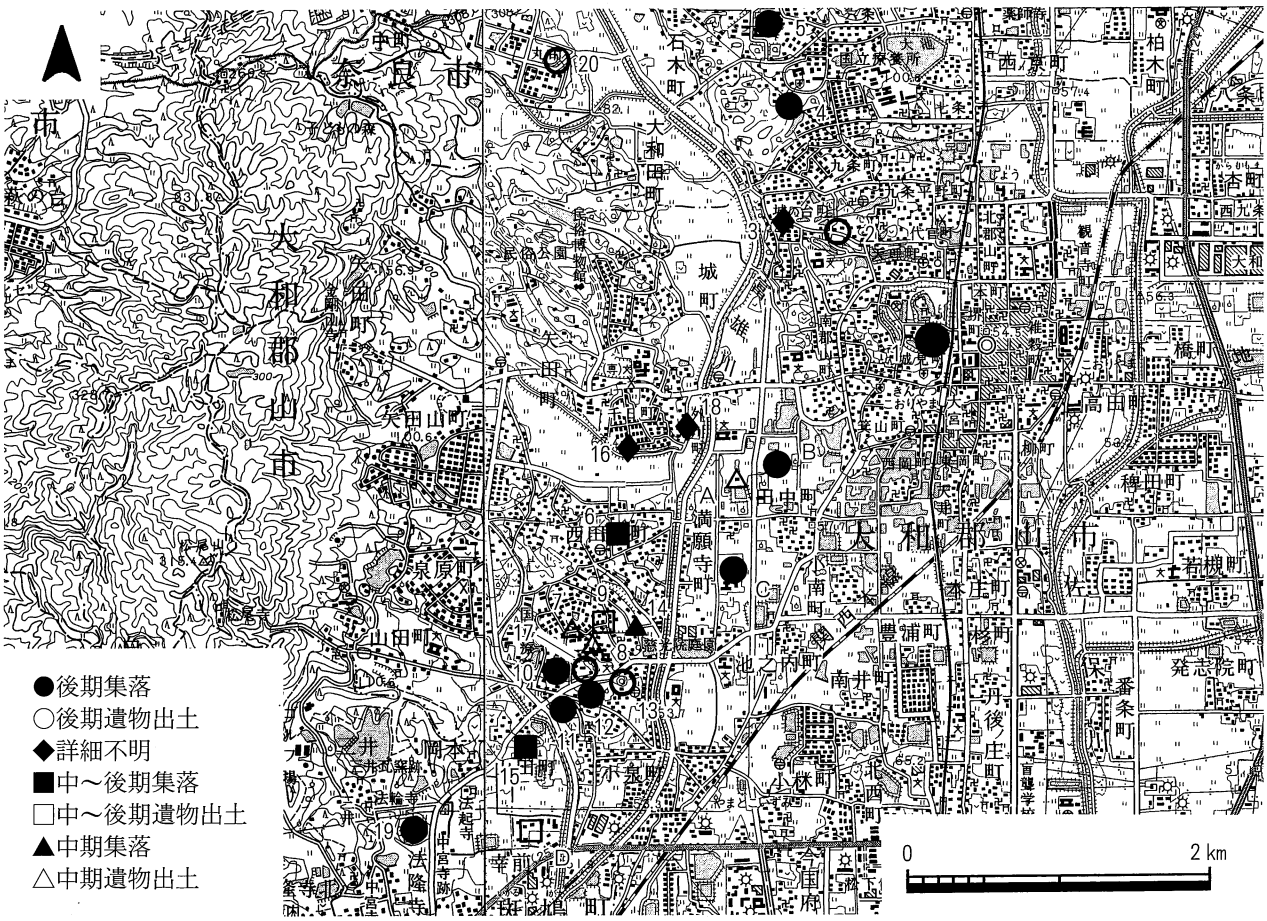


図24. 周辺の低丘陵上の遺跡（1/50,000）

あったと仮定すると、周辺の大まかな地形の形状は、弥生時代当初と大きく変わらないものと考えられる。調査地の南西には、尾根の先端部分がやや小高く隆起している部分（標高68mの等高線が一周する一帯、中心部分の高所の標高は約68.6m）があることがわかる。この部分を中心に奈良時代以降に開発が繰り返されていることが既往の調査から確認されているのだが、弥生時代の集落の中心部分もこの一帯に推定しておきたい。今回の調査地北～北東部分は斜面の傾斜が急になっていることから、今回の調査地が当時の集落のほぼ北東端に相当する可能性が高い。第２・４次調査では、古墳が築造されていた痕跡が確認されている。今回の調査では同様の成果が得られなかったが、これは東西方向の尾根筋の南斜面部分を中心に古墳が築造されていたことによるのかもしれない。

ところで、今回の調査で改めて確認した弥生時代の集落と同様の立地を示す遺跡が市内には幾つか所在している。市内の北西部分は、奈良盆地の北西端から南北に縦走する生駒山地へと連なる一帯である。今回の調査地は生駒山地の一部である西ノ京丘陵の縁辺部に位置しているが、同丘陵上には他にも六条山遺跡や一ノ谷遺跡といった弥生時代の遺跡がある。また、同じく生駒山地の一部である矢田丘陵上にも小泉遺跡や西田中遺跡といった遺跡がある。このような集落の多くは、富雄川の両脇にある、低地との比高差が５～20mの低丘陵上に分布している。これら周辺の低丘陵上に位置する弥生時代の遺跡をまとめたものが、図24と表10である。

これらの遺跡の時期は大きく中期のもの、後期のもの、中期から後期にわたるものにわけることができる。集落遺跡は後期に属するものが多いが、後期を通して継続して営まれている集落は現在のところ六条山遺跡や三井岡原遺跡など少数で、他は短期間で出現・廃絶している。また、各遺跡の調査面積によるところもあるのだが、面的に住居が密集して展開する遺跡はほとんど無く、点状に２～３

	遺　跡　名	主な遺構	時　期	標高（m）	低地との比高差（m）	文　献
1	郡山城下層	竪穴住居	後期	64～67	約11	本書
2	別所谷遺跡	谷堆積土	後期	約86	約15	1
3	城の台遺跡		後期?	90～98	約20	－
4	一ノ谷遺跡	竪穴住居	後期	90～99	約15	2
5	六条山遺跡	竪穴住居	後期	約100	約25	3
6	西田中遺跡	竪穴住居	中期～後期	65～68	約 5	4，5
7	小泉遺跡（狐塚地区）	土器たまり	中期	約73	約10	6
8	小泉遺跡（調練場地区）	方形周溝墓	中期	60～70	約 5	7
9	小泉東狐塚古墳	墳丘盛土中	中期～後期	約70	約10	8
10	小泉遺跡（大塚地区）	竪穴住居	後期	約75	約20	9
11	天神山遺跡	竪穴住居	後期	約62	約 7	1988年市教委調査
12	小泉陣屋下層	竪穴住居	後期	約70	約15	2006年市教委調査
13	六道山古墳	墳丘下包含層	後期	約60	約 5	4，10
14	慈光院裏山遺跡	竪穴住居	中期	約65	約 7	11
15	菩提山遺跡	竪穴住居	中期～後期	約64	約 7	12
16	割塚古墳	墳丘下包含層	不明	約67	約 5	13
17	小泉大塚古墳	墳丘盛土中	後期	約81	約24	14
18	外川遺跡		後期?	約70	約 7	－
19	三井岡原遺跡	竪穴住居	後期	58～63	約10	15
20	富雄丸山古墳群	墳丘盛土中	後期	約96	約15	16
A	古屋敷遺跡	自然流路，溝	前期～中期	約60		17，18
B	田中垣内遺跡	竪穴住居	後期	約60		19
C	満願寺遺跡	竪穴住居	後期	約57		20
D	原田遺跡		中期～後期	約50		21

表10. 西ノ京および矢田丘陵の弥生時代遺跡

棟の住居が重複してまとまって検出される事例が多い。比較的多くの住居が継続的に営まれている六条山遺跡などをみても、各段階の住居はごく少数となるようだ。三井岡原遺跡のように集落を画する溝等の遺構が検出される遺跡もあるが、非常に少ない。

一方、西田中遺跡は、中期に住居が比較的密集して営まれる集落である。集落の盛期は中期で、後期には遺物が少数出土するのみとなっているが、古墳時代になっても集落が存在しているようだ。これは、他の集落の多くが古墳時代に入ると墓域に変化することとも異なっている。低丘陵上の遺跡で弥生時代の墓域として遺構が確認されている遺跡は小泉遺跡（調練場地区）の方形周溝墓や甕棺のみである。このような中期に属する遺跡については、今回調査した遺跡を含めた後期に散在的に営まれる集落とは区別しておくべきであろう。

先述したとおり、今回調査した遺跡は、周辺の調査で古墳に伴う遺物が出土していることからも、弥生時代の集落が廃絶した後は、墓域としての土地利用があった可能性が高い。尾根筋の斜面に少数の住居が営まれている点や、時期が短期間に限定される点なども合わせて、小泉遺跡（大塚地区など）の集落と類似していると指摘することができる。小泉遺跡は、丘陵縁辺部から派出する複雑な尾根筋上にさらに遺跡が広がっていることが予想され、各尾根単位での集落の成立背景や時期的な変遷が明らかになっているとは言えない。今回調査した集落についても同様で、周辺の尾根上での遺跡の展開や特徴が明らかになっていない。よって、現時点では、検出した遺構の密度や立地から拠点的で母体となる集落からの分村的な集落という位置付けに留めておく。

弥生時代後期の低丘陵上の小規模な集落遺跡の成立背景には多様な成立背景があるのであろうが、今回調査した集落は、少なくとも拠点的な集落とはなり得ないと考えられる。生産基盤が近い低湿地を中心に拠点的な集落が形成されているものと考えられるのだが、現在のところ、調査地の周辺ではそのような集落の検出例がない。低丘陵の縁辺にも幾つか弥生時代の遺跡が点在するものの、いずれも断片的な遺構・遺物の出土である。今回調査した遺跡は、今後母体となる集落の様相がある程度判

明した上で、さらに厳密な評価が可能になるものであり、今後の大きな課題である。

註

弥生土器の編年は奈良県立橿原考古学研究所編2003『奈良県の弥生土器集成』による。

表10文献

1．佐々木好直 1997 『別所谷遺跡』奈良県文化財調査報告書第75集　奈良県立橿原考古学研究所
2．三須俊介・岡林孝作 1996 『一ノ谷遺跡』奈良県文化財調査報告書第74集　奈良県立橿原考古学研究所
3．寺沢薫編 1980 『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集　奈良県立橿原考古学研究所
4．服部伊久男 1985 『西田中遺跡第１・２次発掘調査概要報告』大和郡山市文化財調査概要４　大和郡山市教育委員会
5．濱口芳郎 2000 『西田中遺跡 藤原宮造瓦所の調査』大和郡山市文化財調査概要40　大和郡山市教育委員会
6．安永周平・川部浩司 2005 「小泉遺跡（狐塚地区）」『奈良県遺跡調査概報2004年』 奈良県立橿原考古学研究所
7．長谷川俊幸 1983 「小泉遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』 奈良県立橿原考古学研究所
8．伊藤勇輔 1976 「（９）東狐塚古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』奈良県文化財調査報告書第28集　奈良県立橿原考古学研究所
9．今尾文昭編 1990 「小泉遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1989年度』 奈良県立橿原考古学研究所
10．服部伊久男 1992 『六道山古墳Ⅰ　第２次緊急発掘調査報告書』大和郡山市文化財調査概要23　大和郡山市教育委員会
11．竹田政敬 1989 「慈光院裏山」『大和を掘る1988年度発掘調査速報展Ⅸ』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
12．服部伊久男 1988 『菩提山遺跡発掘調査概要報告書』大和郡山市文化財調査概要10　大和郡山市教育委員会
13．小島俊次 1969 「割塚古墳の調査」『青陵』14　奈良県立橿原考古学研究所
14．奈良県立橿原考古学研究所編 1997 『島の山古墳調査概要　付.小泉大塚古墳調査報告』 学生社
15．寺沢薫編 2003 『三井岡原遺跡』奈良県文化財調査報告書第94集　奈良県立橿原考古学研究所
16．泉森皎編 1973 『奈良県文化財調査報告書第19集―奈良市大和田町富雄丸山古墳群発掘調査報告―』 奈良県教育委員会
17．秦鳳月 1936「大和に於ける新發見の遺物採集地報告」『考古学雑誌』26－６
18．林部均 1989 「古屋敷遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1986年度』 奈良県立橿原考古学研究所
19．大和郡山市教育委員会 2003 「田中垣内遺跡第２次～第４次調査」『平成14年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
20．藤井利章・嘉藤恵喜 1983 「満願寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』 奈良県立橿原考古学研究所
21．山川均編 1992 『原田遺跡第３次調査報告』大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　大和郡山市教育委員会

参考文献

石野博信 1973 「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要　考古学論功』第２冊　奈良県立橿原考古学研究所

川上洋一 2001 「大和後期社会の動態―奈良・郡山地域の検討―」『みずほ』第36号　大和弥生文化の会

寺沢薫 1979 「大和弥生社会の展開とその特質―初期ヤマト政権成立史の再検討―」『橿原考古学研究所論集』第４　吉川弘文館

寺沢薫 2003 「第２節 弥生時代後期低丘陵性集落の位置づけと高地性集落論」『三井岡原遺跡』奈良県文化財調査報告第94集　奈良県立橿原考古学研究所

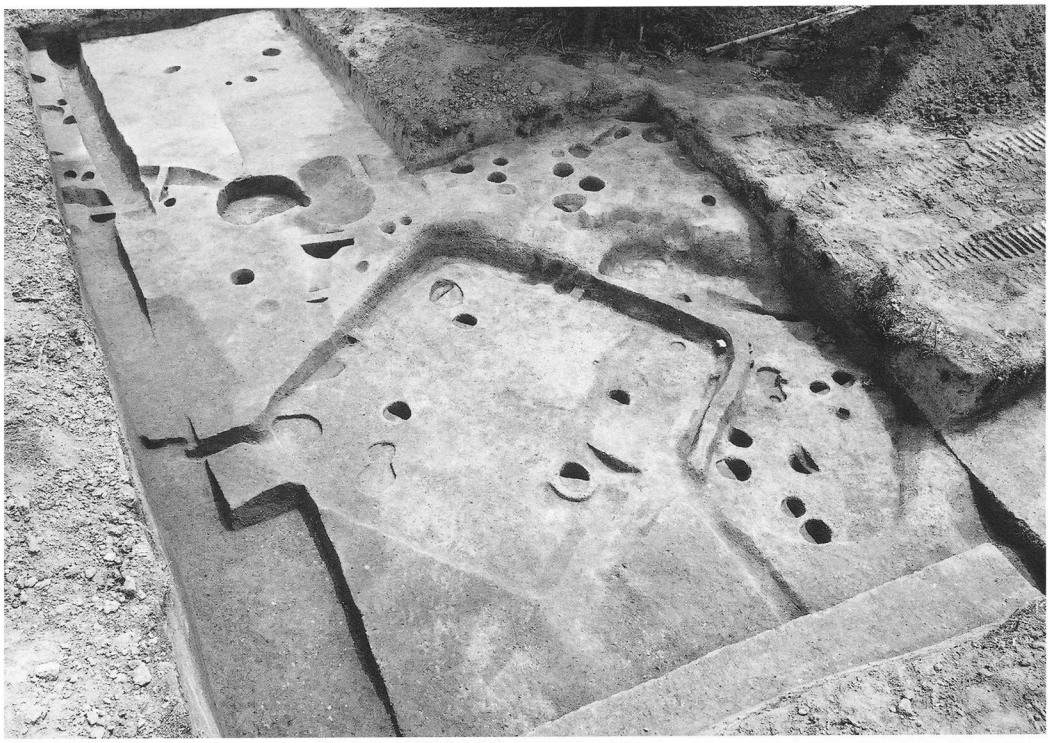
奈良県立橿原考古学研究所編 2003 『奈良県の弥生土器集成』橿原考古学研究所研究成果第６冊

山川均 1993 「単位地域論―奈良盆地における弥生集落を中心に―」『橿原考古学研究所紀要　考古学論功』第17冊　奈良県立橿原考古学研究所

各遺跡の報告書は割愛した。表10を参照されたい。

図　版

写真３．郡山城と調査地（南から）

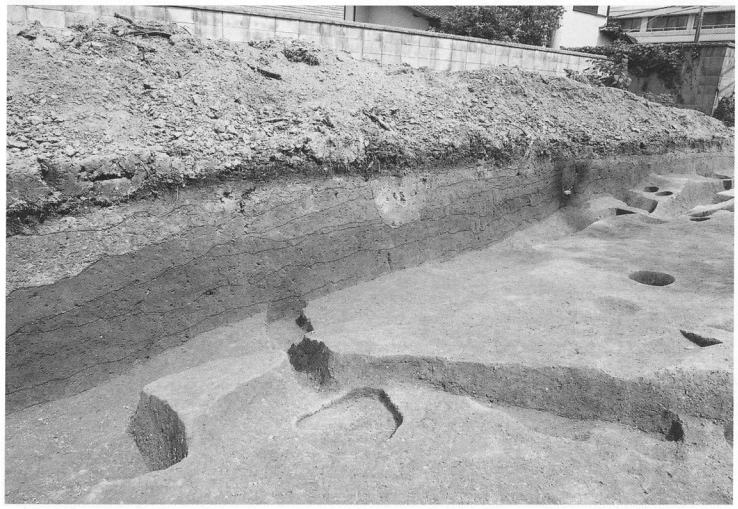


調査区全景（北東から）

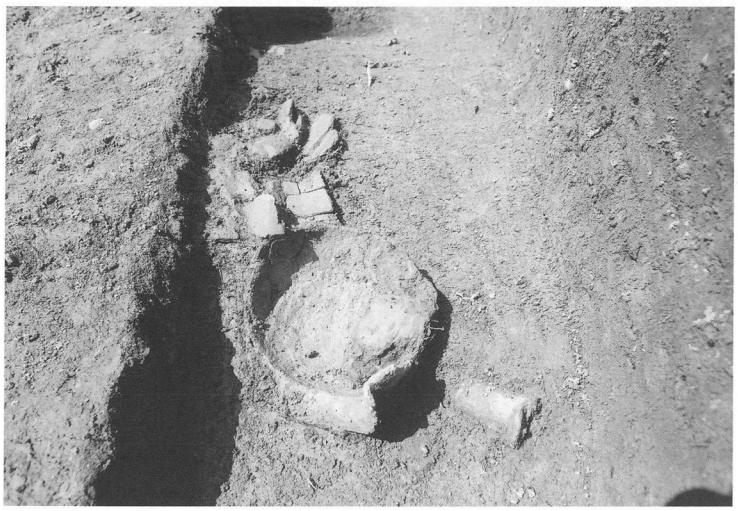
調査区から北方の谷を望む（南から）

図版 2

調査区東壁土層（西から）

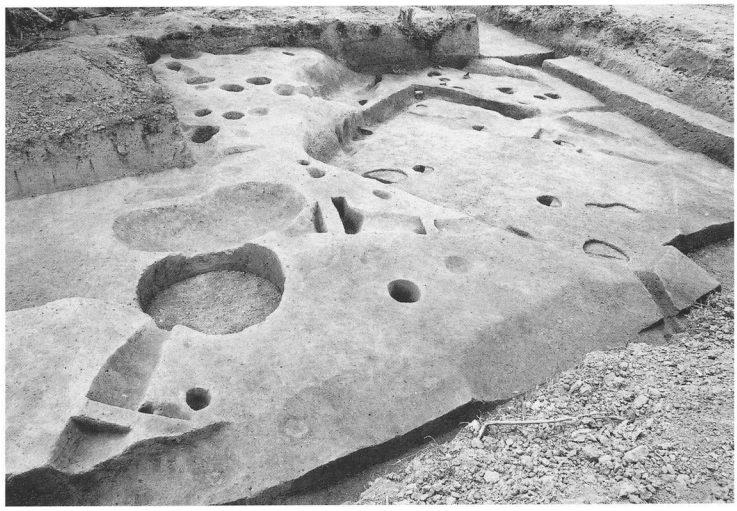


調査区東壁土層（北西から）

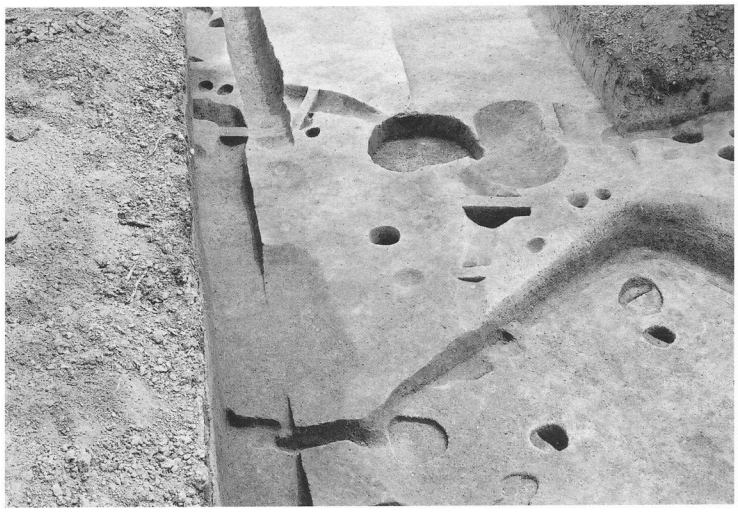


包含層遺物出土状況

竪穴住居１・２近影
（北西から）



調査区近影（南東から）



調査区近影（北から）

図版 4

竪穴住居 1（北東から）

竪穴住居 1 柱穴近影

竪穴住居 1 炭混入土
（北東から）

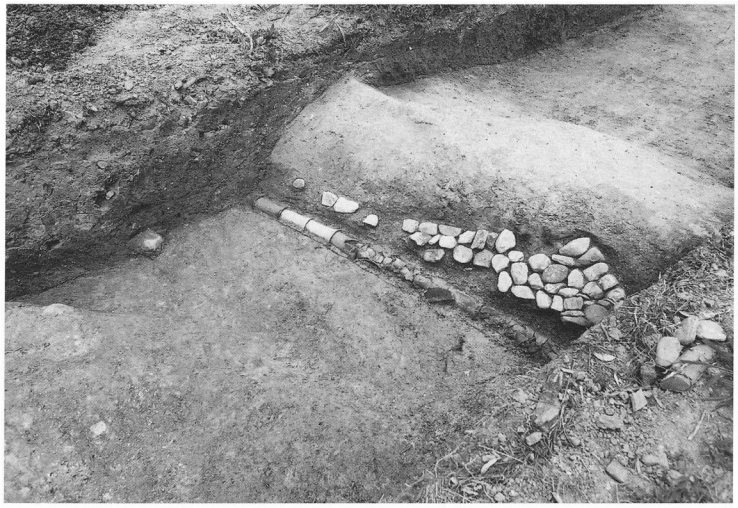
竪穴住居 2（南から）

竪穴住居 2 遺物出土状況
（南から）

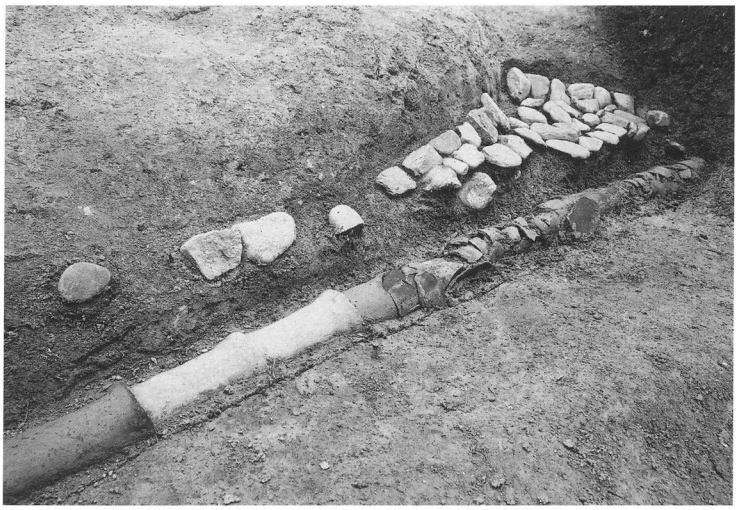
竪穴住居 2 埋土（南西から）

図版 6

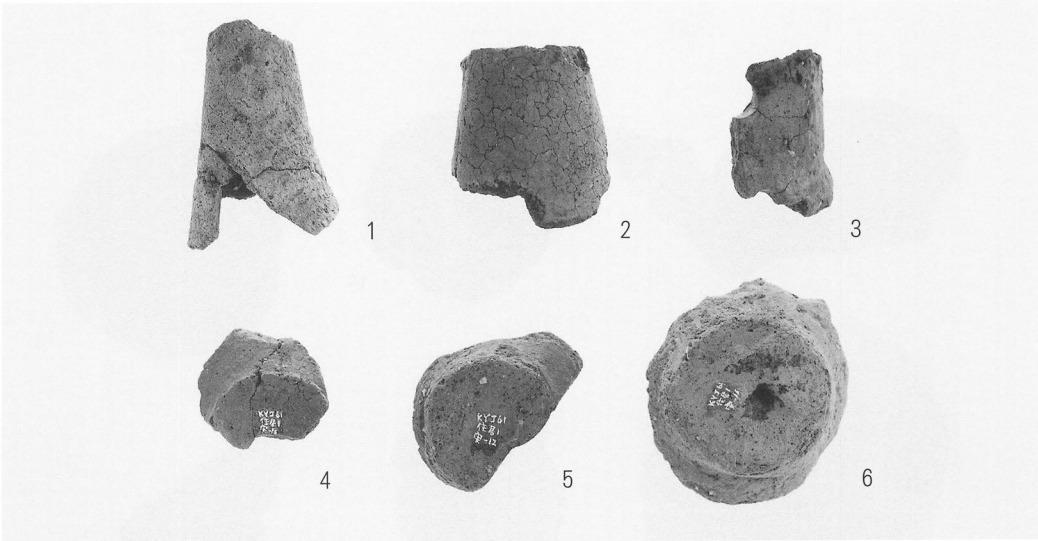
埋甕（南から）



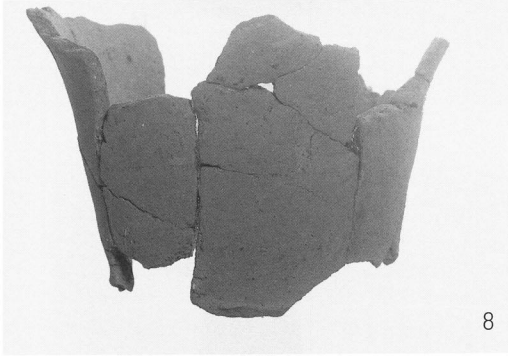
貼石遺構（南西から）



貼石遺構近影（北西から）

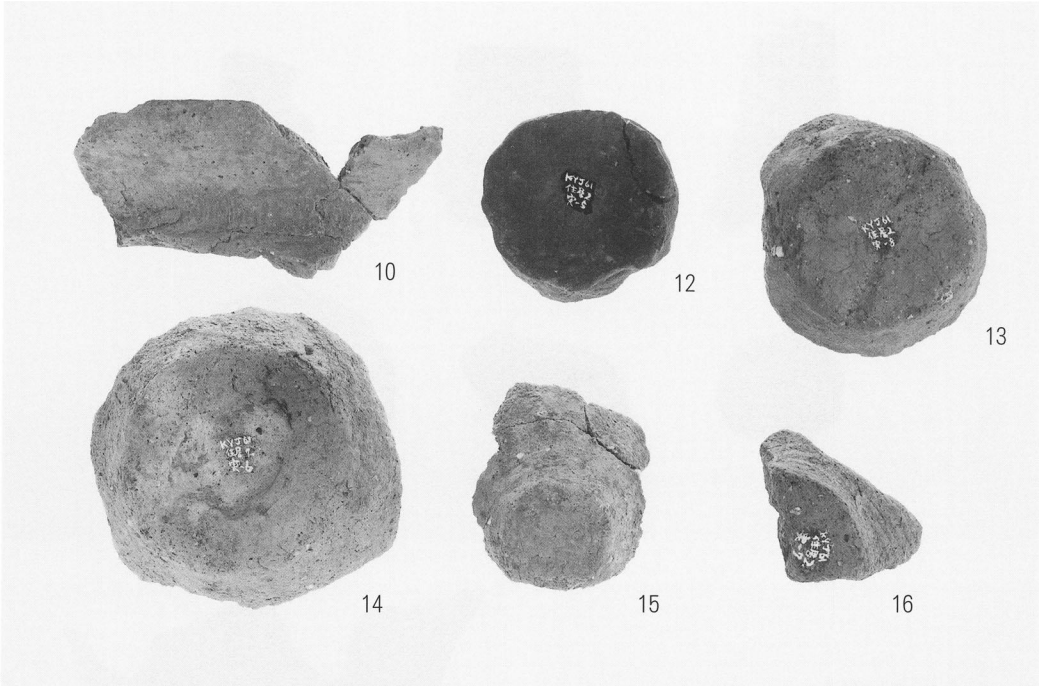

1
2
3
4
5
6

7


8

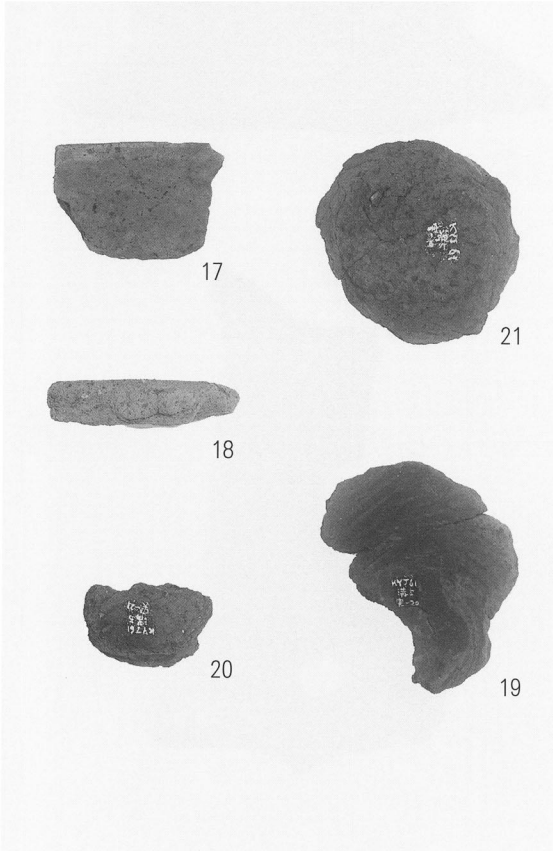
9

11


10
12
13
14
15
16

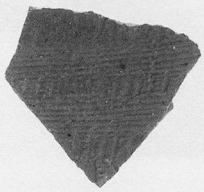
23

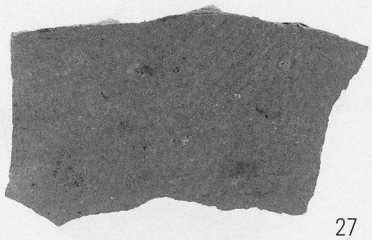
22


17
21
18
20
19

24

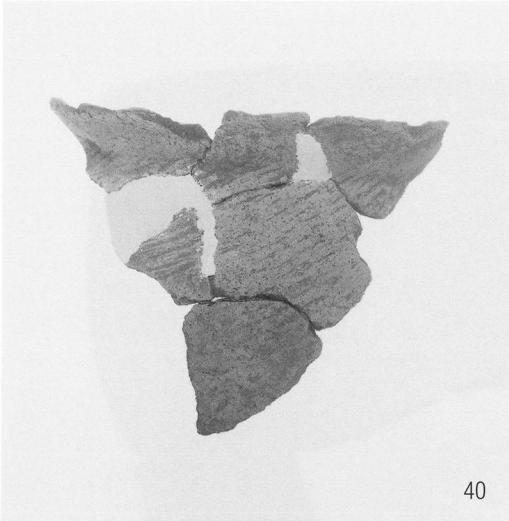
25

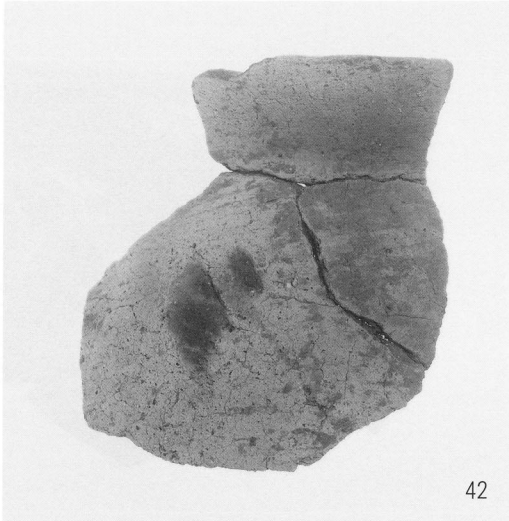

26


27

29

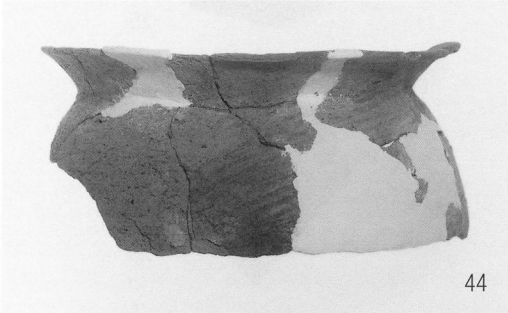
31


40


42

41

43

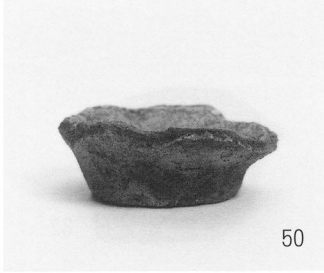

44

57

67

46

48


50

51

52

54

56

61

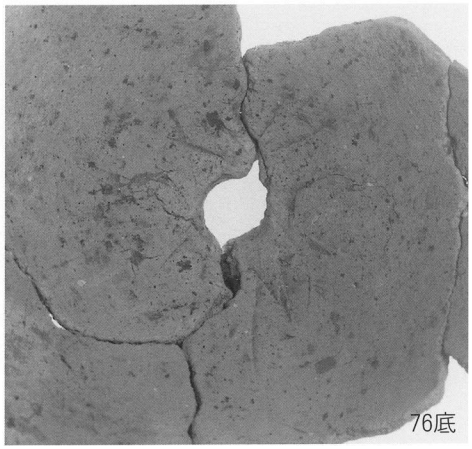
85

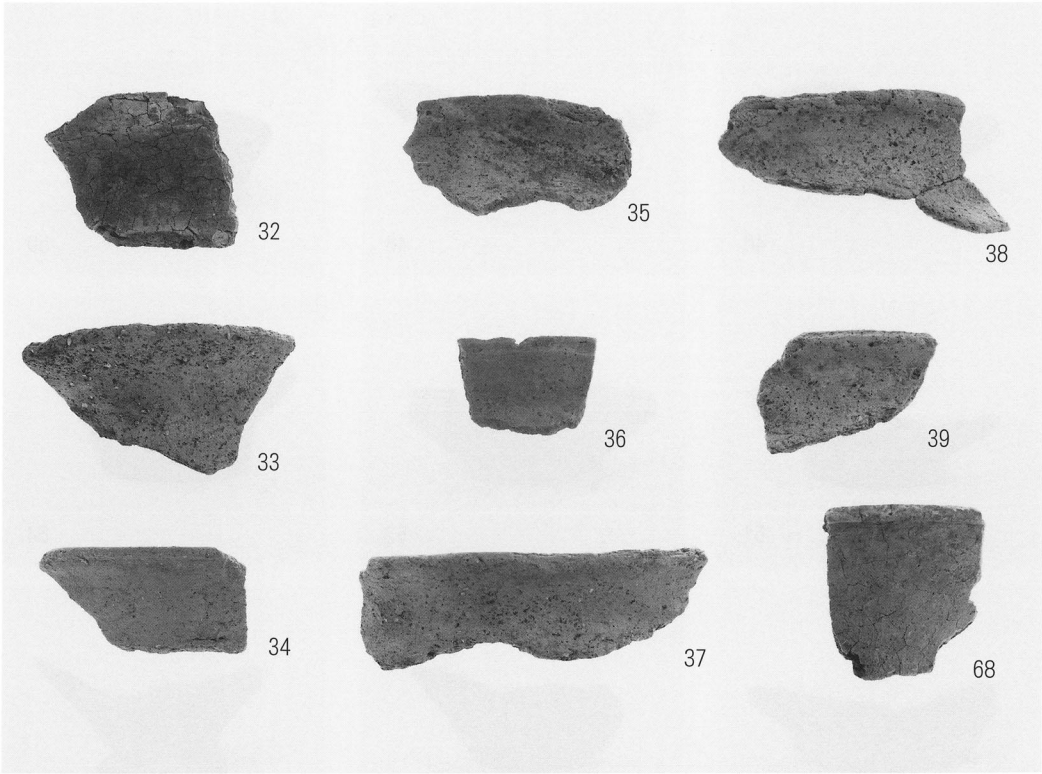
87

88

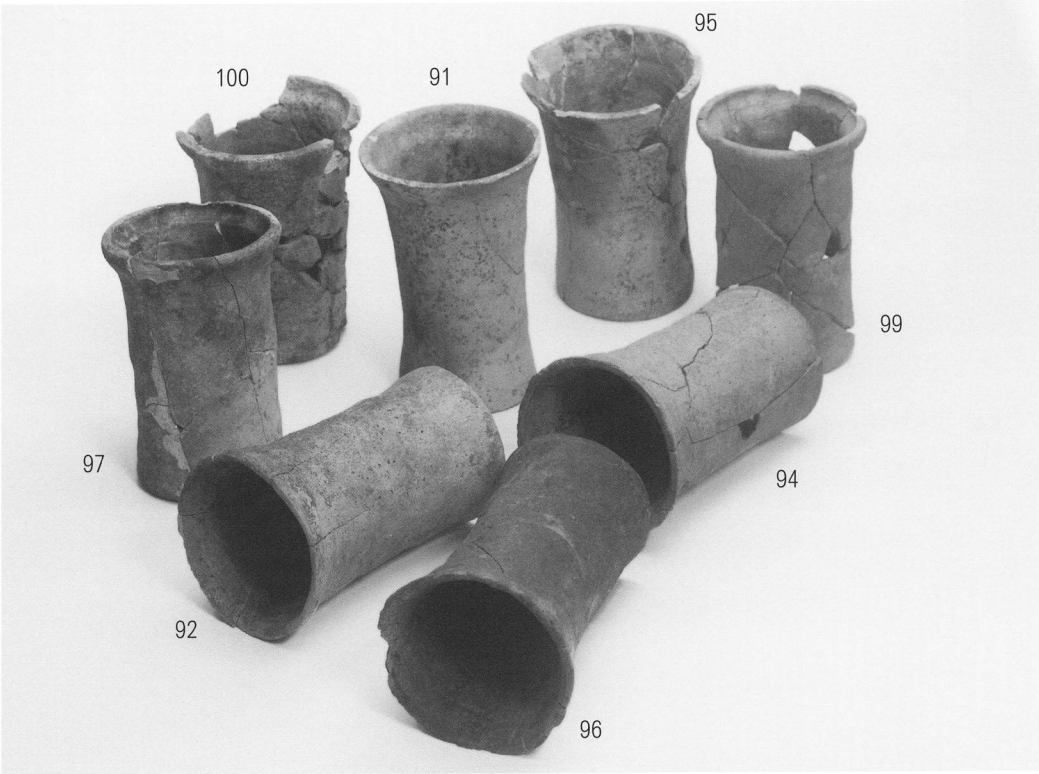
89

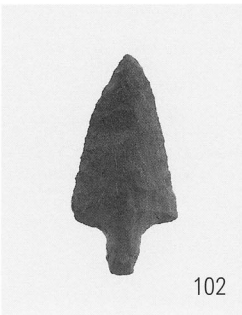
76

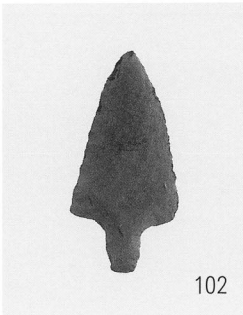

76底

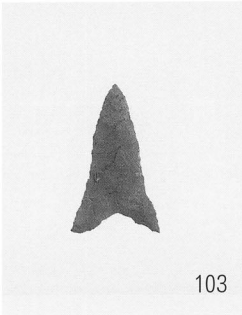

32
35
38
33
36
39
34
37
68

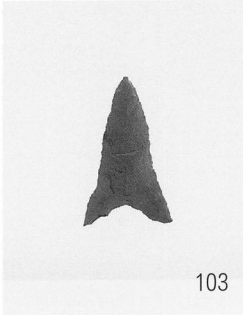
70
72
74
71
73

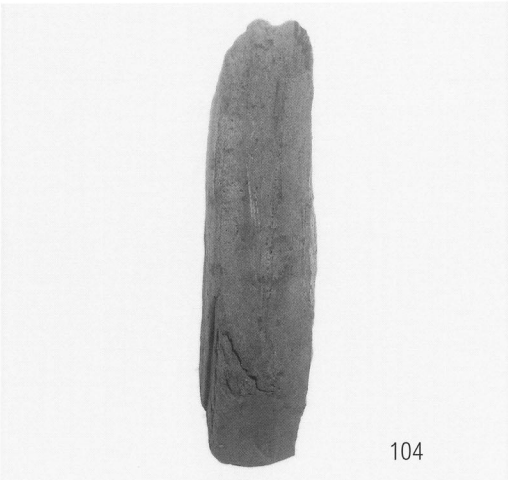

95
100
91
99
97
94
92
96

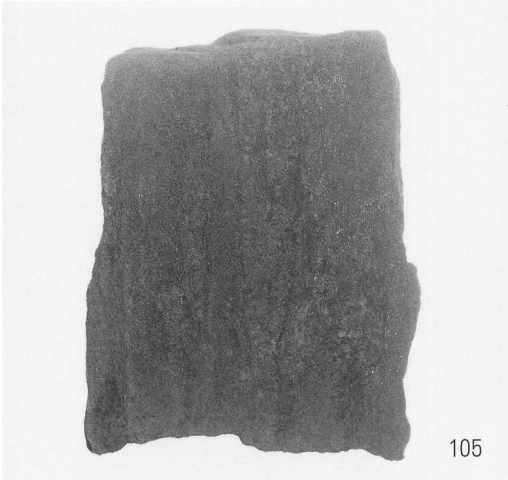

102


102


103


103


104


105

報告書抄録

ふりがな	こおりやまじょうだいろくじゅういちじ
書名	郡山城第61次
副書名	弥生時代集落の調査
巻次	
シリーズ名	大和郡山埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	十文字健
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1198　大和郡山市北郡山町248-4
発行年月日	2008年8月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
郡山城（こおりやまじょう）第61次	奈良県（ならけん）大和郡山市（やまとこおりやまし）城見町（しろみちょう）546-2他	29203	——	34°38’53”	135°46’47”	試掘確認調査 2006. 4.17～4.18 本調査 2006. 6.19～7.10	試掘確認調査 86㎡ 本調査 120㎡	マンション建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山城第61次	城郭	弥生 近世	竪穴住居、溝、土坑（弥生時代）、貼石遺構、埋甕（近世）	弥生土器、石器、瓦質土器	郡山城築城以前の弥生時代集落の遺構をはじめて検出。

郡山城第61次
—弥生時代集落の調査—
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

2008年 8 月31日　発行

著作権所有　大和郡山市北郡山町248-4
発　行　者　大和郡山市教育委員会

印　刷　者　奈良市三条大路 2 丁目2-6
共同精版印刷株式会社